

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## アジア読本モンゴル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4582">http://hdl.handle.net/10502/4582</a>

**きらめき**

●ナーダム

## 白髪のカ士、ナーダムに舞う

松田邦子

●七月のトール川

ウランバートル市内に、草原をぬうようにトール川が流れている。そのほとりに、一人の白髪の方が、モンゴルの男がよくやるかっこうで、横向きに寝転んでいる。

豊かなおなかを丸出しにして、片ひじで腰を支えて、ゆったりと。白髪の方は、ソソルバランという名の、モンゴル相撲のボフ（カ士）である。六〇歳の現役だ。七月の日差しが暑いのか、ボフの着用するゾドグとよばれるチョッキをぬいで、腰に巻き付けている。ゴタル（グーツ）も草の上にごろんと転がし、ショーダグという短いパンツ一枚になっている。

私を見つけると、彼は上半身を起こし、言葉だけの挨拶を交わした。この国では、握手はともポピュラーな挨拶なのだが、彼は手を出そうとしない。ボフは、試合前に女性に触れることを忌み嫌うのだ。力が落ちてしま

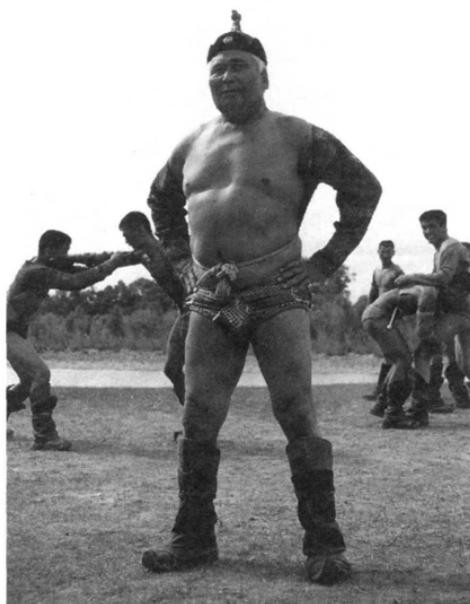
うという。ほかにも試合前には、脂肪分の多い肉やスーティツアイ（牛乳入りのお茶）などを口にするこや、笑うことを戒めるしきたりがある。

「社会主義を経験したこの国で、今でもなお、民族服や帽子が残っているのは、ボフたちが敵しいしきたりに基づいて、それを着用し続けたからなんだ」とソソルバランは言う。それだけ、ボフのしきたりは厳格だということだ。最近の若いボフには軽視するものも多いが、彼はそれをかたくなに守り続けている。

彼のかたわらでは、一〇人ほどの若いボフたちが、七月の一日（革命記念日）から一二日にかけておこなわれる国主催のナーダム出場のため、実戦しながらのけいこをしている。「もっと相手の体と離れて、技を掛けなければだめだ」——私との会話の途中でも、若いボフたちの身のこなしに目を配り、大声で指導する。毎年七月が

近づく、こうしてトール川ほとりの草地でけいこをつけるのである。

もうすぐ、相撲・競馬・弓射の三種の競技会、ナーダムが始まる。ナーダムとは、モンゴル語で「遊び」という意味だ。この国最大の「遊び」が近づく、食料品などの物価が上昇するとともに、国中の人びとも徐々に熱気を帯びてくる。おのずと相撲のけいこにも気合が入るというものだ。ソソル balan も腰痛をおしてナーダムには出場する。



ソソル balan の勇姿。

全国レベルの国のナーダムとは別に、夏の季節を通じて各地で地方ナーダムもおこなわれる。けいこの手を休めて、若いボフの一人が教えてくれるには、ウランバートル近くのエルデネ・ソムで、七月五日にソム主催のナーダムがあるという。しきりに見に行くように薦めるのは、そこが若者の出身地というだけではないようだ。スタジアムでおこなう国のナーダムでは味わえない、草原のナーダムならではの醍醐味があるらしい。国のナーダムを目前に控えた駿馬たちの、練習と選抜を兼ねた競馬も見どころだという。人数が集まらないので、弓射はおこなわないようだ。

「そのエルデネ・ソムのナーダムでも相撲はおこなわれるの？」と私が問うと、周囲の人びとは一斉に声をたてて笑う。「相撲のないナーダムなんてないよ」と。どうやら、弓射や競馬がないナーダムはあり得ても、相撲のないナーダムは考えられないらしい。モンゴルの人びとにとって、相撲は三種の競技の中でも格別な存在なのである。

### ●ナーダム復活への思い

全国レベルのナーダムには、ふつう五二二人のボフが

参加し、トーナメント戦（勝ち抜き戦）がおこなわれる。

ボフの称号は、五回戦を勝ち進むとナチン（ハヤブサ・鷹）、ベスト四に残ればザーン（象）、優勝すればアルスラン（獅子）、二度の優勝でアウラガ（巨人）、三度の優勝でバイン・アウラガ（常勝のアウラガ）、四度の優勝でダライ・アウラガ（偉大なるアウラガ）、五度の優勝でダルハン・アウラガ（神聖なるアウラガ）となる。現在では、ダルハン・アウラガが四人、アウラガが一人、現役で相撲をとっている。それに次ぐのが、アルスランの称号をもつソソル balan なのである。

一度称号を受けると、より上の称号に格上げされることはあっても、日本の大相撲のように、位が下がることはない。また、いわゆるプロとして相撲を取っているわけではなく、他に職業をもっている。

日本の大相撲と異なる点は他にもある。モンゴルでは土俵はなく、肘や膝、頭などが地につけば負けとなり、手のひらはついてもよいことになっている。だから、当然のことだが「押し出し」「寄り切り」などという決め技がないかわりに、技をかける手が地に触れてしまう「足の裏をとる」という決め技や、「両手を地面につけて、

足で相手の体を挟んで倒す技などもある。

また、モンゴルの相撲は長期戦だ。土俵がないのだから、技を仕掛けられれば、素早く身をかわず場所はいくらでもある。一步近づけば一步逃げる、これを繰り返すのだ。そのうえ、時間制限もない。両者は見合ったまま、組み手の駆け引きで時間は流れる。社会主義時代には一試合の制限時間を設けた。しかし、民主化以降「革命以前の“本来”のナーダム」志向が高まる中、時間をたっぷりかけた持久戦が復活した。私の見た最高タイムは、一組の取り組みが四時間を超えるものであった。さすがにボフたちも試合の途中で中断し、体をほぐし、馬乳酒を飲む、いわゆる「水入り」大相撲であった。

こうした、両手についてもよいルールや、短いショードグや胸の開いた長袖のゾドグなどの服装は、モンゴル国の七〇％以上を占めるハルハ族の相撲を特徴づけるものである。国のナーダムは、このハルハの相撲を採用しているのである。モンゴル国東部や中国内蒙古自治区などでは、同時に両手が地面につくと負けになる。また、手で相手の足を取ってはいけないというルールもある。幅広の長ズボンと皮のチョッキを着用するなど、服装に

おいても大きな違いがある。また、オブス県やホブド県などの西部では、上半身裸で短いパンツのみをはき、裸足で相撲をとる。片手でも地面につけば負けるところもハルハの相撲と異なる。

ここ数年、ウランバートルでおこなわれる全国規模のナーダムでは、ますます「ハルハ」化が進んでいる。競馬の疾走コースも、一七世紀にハルハ族が独自におこなっていたナーダムの「本来」のコースに戻そうという動きもでてきた。また、ポフの勝利の舞いを、社会主義時



相撲のトンゴロホ技(上)とウマに対するトンゴロホ技。

代は国旗の前でおこなっていたのが、チンギス・ハーン時代の幟のぼりの前でおこなうようになった。また、チンギス・ハーン時代の兵士姿も、ナーダム当日の市内パレードに新たに加わった。

こうした民族意識を強く打ち出す流れの中で、ハルハ以外の人びとの民族意識も刺激されることとなった。地方のナーダムは、国からの補助が望めず資金不足で姿を消す一方で、少数派集団が、独自の方法でナーダムを再開しはじめる動きもあるという。西部のオイラト系の人

びとの間では、「ボホ・バリルダーン（種ウシの相撲）」と呼ばれる、レスリングに似た独自の相撲を、地元のナーダムで始めたという報告もある。

### ●小犬から獅子へ

ソソルバランは、幼いとき「ハヴ」というあだ名で通っていた。チンのような小さな犬という意味だ。彼はトウブ県のバヤンバラート・ソムの遊牧民の家庭に育ったが、色が白く小柄な少年だったらしい。母親はそれをあまり縁起のよくない呼び名だと思い、僧侶に相談したこともあったという。

ソソルバラン少年は、草原の上で友達とよく相撲をとった。相撲は大好きだったが、体が小さいためさほど強くはなかった。しかし、一六歳の夏休みするとき、学校の寮から故郷の家族の元にもどり、家畜の世話の手伝いをしたおかげで、みるみる体がたくましくなっていた。

特に、ウマやヒツジに水を飲ませるため、井戸から水を何度も汲み上げるうちに、胸の力がついたという。これがボフになったきっかけだと彼は言う。このときに培った胸の力が今の自分をつくりあげたと……。

その強靱な胸の力を生かして、彼の得意技は、「ダブ

ハル・ホンゴドホ」「ソイラホ」と「トンゴロホ」の三種である。今までの取り組みも、ほとんどこれらの技で勝ってきた。

「ダブハル・ホンゴドホ」という技は、「ホンゴドホ」技を、連続二回おこなうという意味である。「ホンゴドホ」とは、太ももの後ろ側の一番太い部分（ホンゴ）を手でつかまえ、引き倒したりかつき上げたりして倒す技である。「ソイラホ」は、相手の膝や脛（すね）を手で取って、体を押し倒したり、持ち上げたりして倒す技である。これは、子どもたちが子ウマや子ウシ、ヒツジなどの小さな家畜を、戯れで倒したりしてじゃれあうときに、同じ動作をするという。

「トンゴロホ」は、もともとのモンゴル語の意味が「ウマなどの家畜が後ろ脚を振り上げて暴れる、または、ひっくりかえる」という意味の動詞である。それが相撲の場面では、相手の体重を自分の手や足、腰などの上に一旦のせ、相手をひっくりかえす技となる。四〇〇を数えろと言われる技のなかでも、非常に多用される技である。これは、「家畜がひっくりかえる」というもともとの意味からも想像がつくように、家畜に対しても「トンゴロ

ホ」技は用いられる。たとえば群れの中のウマを、乗用ウマに調教するときなどに、つかまえてひっくりかえす際にウマに仕掛ける技である。

体ができあがったソソルバランは、一七歳で初めて故郷のバヤンブラート・ソムのナーダムに出場し、準決勝まで勝ち残るといふ快挙を果たした。そのときに、優勝した地元の英雄ボフに、「二年后には、もはや自分はソソルバランには勝てないだろう」と見込まれた。その言葉どおり、一九歳のときには、決勝戦でそのかつての優



ホンゴドホ技。



ソイラホ技。



ソソルバラン(中央)のデウエー。

勝ボフを負かし、見事優勝を果たす。二三歳で国のナーダムに初めて出場し、七回戦を勝ち抜きみごとベスト四に残ってザーン(象)の称号を得ている。小犬と呼ばれた少年は、その後二五歳にして国のアルスラン(獅子)の称号を得ることとなるのである。

#### ●鳥の飛ぶがごとくに

ナーダムがおこなわれるスタジアムにも、モンゴル独特のコスモロジー(世界観)が当てはめられている。つまりスタジアムは大きなゲルということだ。ゲルは入り

口を南東に向け、それを「南」および「前」とみなす。そして「後ろ」、すなわち「北」が貴い方角とされ、ゲルでは主人の席とされている。スタジアムにおいても大統領など来賓は「北」に座って観戦する。ボフが入場するのは、常に「南」からだ。

そのうえ相撲では南面して左、すなわち東側が「大きい側」、西側が「小さい側」と呼ばれる。ボフは称号の順番に「北」側の「大きい側」(東)、次が「北」側の「小さい側」(西)という具合に、交互に並ぶのである。そうして、三、五、七回戦にはボフ一人ひとりに付いたザソール(介添え人)が、自分のボフの特長を高らかに詠ずるのである。その間、ボフ当人はザソールの右肩に手を置き、鳥がはばたくように舞うのである。その舞いを「デウエー<sup>はばたき</sup>」と言い、鷹や鷲など大型の鳥を模したものとされる。特に、称号の高いボフになると、「ハンガルディ」という鳥の王を表現すると言われている。「ハンガルディ」(ガルダ、日本では迦楼羅<sup>カラス</sup>)は、仏教文化を背景に広く伝承されている想像上の鳥である。民主化が始まってからは、ボフの帽子のメダルにも、この「ハンガルディ」の存在を復活させている。

ソソル balan は、前日の一回戦を、相撲を始めて間もないボフ相手に、得意技「ホンゴドホ」で勝利し、二回戦には軍人ボフに「ソイラホ」技で勝利した。今日はナードム二日めの三回戦。三回戦からは、称号の高いボフが、自分の相手を指名できるのである。彼は、エルデネバットという若手ボフを選んだ。そして西の「小さい側」の「北」から三番目のザソールの肩にとまり、空を見据え、ゆったりと鳥の羽ばたきをしている。ザソールは、意気揚々と張りのある声で、彼の勇壮な姿を吟じあげる。

東側のザソールよ、聞きたまえ。ボフを指名しようぞ。

モンゴル帝国建国七九〇周年記念、  
人民革命の偉大な七五周年記念日、  
全国民が待ちに待ったナードムの

西側のダゴール・マグナイ(西側で三番めの位)

トゥブ県バヤンバラット・ソム出身、農業大学の教員

モンゴル国のアルスラン、

ソソル balan がポフを指名しようぞ！

光彩を放ち、未だ衰えを知らず

素早い身のこなし、力漲り、鳥が飛ぶよう

知恵明るく、気力充実

日々向上し、人間のもつ能力をすべて發揮できうる

モンゴル国のアルスラン、ソソル balan であるぞ！

東側に控える軍隊のポフ、エルデネバットを選んで

ナーダムご覧の皆々様の目の前で、全力を尽くし

数々のすばらしい技を競いあい、

相撲をとろうではないか！

彼は、草の上に舞いおりる鳥のはばたきのようにゆっ

たりとした動作で、ザソールの周りをデウエーする。人

と自然に自分の力を見せているのだという。ザソールの

言葉の調べにのってデウエーをすると、何とも言えず壮

快で、活気が体に満ちてくるのが分かるのだそうだ。彼

の白髪が銀色に輝く一瞬だ。

試合前、そういえば彼はこんなことを言っていた。

「ポフが引退するときには、ゾドグを、自分が見込んだ  
若いポフに渡すというしきたりがある。自分もゾドグを

渡すべき若者を探しはじめている。しかし、現在新しく  
ウランバートル市内に建築中の相撲スタジアムの開幕ま  
で、モンゴル力士同盟から引退を待ってくれるように頼  
まれている。だから、年を取り、二回戦や三回戦程度で  
すぐに敗退してしまふ姿をさらしても、こうして今年  
もナーダムに参加するんだ」

彼はこの三回戦で、自ら指名した若手ポフに、まことに  
あっさりと負けることになる。ゾドグのおなかのひも  
をはずす行為が、すなわち負けを認める行為なのだ、が、  
彼は負けることを予測していたかのように、するりとゾ  
ドグのひもを解き、相手が勝利の鳥の舞をするのを見つ  
めていた。

しかし、ソソル balan のデウエーを眼にすると、勝ち  
進むことなんて、そんなに大切なことではないように思  
えてくる。すばらしいデウエーをすることが彼のポフと  
しての証、それを見ることができれば人びとは満足、そ  
ういう気にさせられる。モンゴル中の人びとの視線を一  
身に集め、ゆったりと両手を広げ、鳥のように舞う、彼  
のきらめく一瞬を見ていると……。

# 伝統音楽のゆくえ

鈴木秀明

## ●国境にまたがるモンゴル人

一九八九年、私は北京に長期滞在していた。中国国籍のモンゴル人、留学生などとしてモンゴル人民共和国（当時）から来て北京に滞在していたモンゴル人、どちらとも親交があったのだが、中ソ和解が成立したときの彼らのうれしそうな顔は忘れることができない。モンゴル人民共和国はソビエト連邦の忠実な衛星国であったから、中ソが鋭く対立していた時期には最悪の場合、同民族で相撃つことも十分予想され、また覚悟していたとモンゴル人は口々に語った。

その後の歴史の進行は多くの人によって語られているが、現在に至るモンゴル民族に関する各方面での大きな変化の原点は、やはりあの中ソ和解を喜ぶモンゴル人たちの顔であったと私は確信している。

モンゴル音楽をめぐる環境にも大きな変化が生じた。

伝統というものは、決して固定されたものではない。社会の変化に伴って、日々変化していくものである。その変化の速度は、そのときどきで大きく異なる。われわれは、モンゴルの伝統文化が最も速く変化している時代を目の当たりにしているのである。ここでは伝統音楽を中心に、近い過去から現代にいたるモンゴル音楽の様相のあらましを述べてみたいと思う。

## ●伝統楽器の代表、モリン・ホール

モンゴルの民族楽器というと日本では「馬頭琴ばとうきん」という名を思い起こす方が多いと思う。ただし馬頭琴は日本語ないし中国語の名称であり、モンゴル語では「モリン・ホール」と呼ばれる。ホールとは、かかえて弓奏する楽器を指す総称であり、さらに広く楽器一般を指す言葉ともなっている。モリン・ホールは「ウマのホール」と訳すことができる。名称をきちんと言うときには「モ

リン・トロガイトイ・ホール（ウマの頭付きのホール）」と呼ばれることもある。簡単に「ホール」とも言う。

モリン・ホールは二本の弦を持つが、この弦は伝統的にウマの尻尾の毛で作られた。毛は一本の弦あたり一〇〇本以上使われるのが普通で、それらの毛が互いに交差しないよう注意してとりつける。弦の両端の部分だけは、三つ編みにしておく。弓でこすると、ウマの毛は一本一本がぶつかりあいながら振動し、モリン・ホール独特の音色を生み出す。

この名称の由来となったのは、楽器の棹の上端に施されたウマの頭の彫刻だが、これが楽器にとりつけられるようになったのはそれほど古いことではない。おそらく二〇〇〜三〇〇年前のことではなかったかと考えられている。ともあれ、モンゴル人が愛してやまないウマの頭を楽器にとりつけたということは、モンゴルのこの楽器に対する深い思い入れを象徴している。モリン・ホールはモンゴルの西部（いわゆるオイラト・モンゴル）ではほとんど流行しなかったようだが、それでもモンゴルを代表する楽器と認めてよいだろう。

モリン・ホールも、近年さまざまな改良が加えられて

きた。モンゴル国では、ソビエト人の協力を得て、楽器の面板が従来のウシやヒツジの皮から木にかえられ、調弦もf—b（ドイツ音名）に定められた。ちなみに内モンゴルの楽器の標準的な調弦はg—cである。

内モンゴルでは面板として、ティンパニー用の皮、蛇皮などが試されたが、最終的に木の板に統一された。さらに細いナイロン糸を、馬毛の代わりに弦として使うことが普通になった。使用する本数は、馬毛の場合とほぼ同じである。これは内モンゴルでは、弓を激しく使う技巧など、演奏の可能性を積極的に追求した結果、ウマの尻尾の毛の強度では短期間のうちに弦が次々に切れてしまふという事態に直面したことにもよる。またウマの尻尾の毛は、湿度などの影響を受けやすいことも関係している。モンゴル国の演奏者は、気象条件が大きく異なる国外で演奏するとき以外は、ナイロン弦は使用していない。

楽器の改良は、どのような音楽表現を求めているかという目的によって方針が決まる。内モンゴルでは、細かいパッセージなどの演奏が容易になるように弦と楽器本体の距離を縮め、弓そのものも改良するなどの工夫が加

えられた。さらにチェロの弦をモリン・ホルルの長さに合わせて切って使用する演奏者も現れた。こちらは従来の馬毛や、ナイロンより調弦が容易になるという利点があるが、モリン・ホルル本来の音色とかなり異なるという理由で、使用している演奏者はあまり多くない。

モンゴル国では、伝統をそのまま残そうという意識が強い傾向が見られるのに対して、中国領内では伝統的な音楽表現を維持するとともに、新しい可能性を追求する指向が強い。特にモンゴル民族の場合、中国という巨大な国の中にある少数民族として、民族音楽のシンボルであるモリン・ホルルも、幅広くかつ強力な表現性を持たないと生き残ることが難しいという危機意識があり、それが楽器改良に力を入れる原動力になっている。

楽器改良についてはモンゴル国、内モンゴルなど中国領内ともにまだ確定したとはいえず、改良がさらに加えられたり、改良された部分があつたの形態に戻されたりする可能性も大きい。

### ●モリン・ホルルの演奏者たち

中国領内では、モリン・ホルル・アンサンブル「イエ・マ」が結成され活動をおこなっている。イエ・マに

は、モリン・ホルルを模したチェロ、コントラバスのほか、アコーディオンなども加わっている。また、一九八九年には「中国馬頭琴学会」が結成された。この学会の主目的は、新たな演奏技法の追求とそのため楽器改良の研究である。また同学会などの主催により、一九九六年七月にはモリン・ホルルのコンクールおよびシンポジウムが、内蒙古自治区の首府・フフホトで開催された。コンクールには内モンゴルだけでなく、新疆ウイグル自治区、遼寧省、吉林省などの演奏者も参加した。またシンポジウムにはモンゴル国からも六名が参加し、そのうち演奏者でもある五名（モリン・ホルル演奏者四名、ホーミ―演唱者一名）は、コンクール閉幕コンサートに出演した。伝統を維持しようとする傾向の強いモンゴル国で、新しい演奏技法を積極的に取り入れようとする演奏者が現れるようになったのは、一九九〇年、内モンゴルのモリン・ホルル演奏者であるチ・ボラグがウランバートルに滞在して教授活動をおこなったことが一つの契機となつた。

そして一九九二年には、モリン・ホルルの演奏団体である「モリン・ホルル・チョーラグ」が結成された。



モリン・ホール。(写真提供：キングレコード・ワールドミュージックライブラリー)



オルティン・ドーの演唱風景。歌手オドバル、モリン・ホール演奏はチンゲルト。

こちらは二八名のメンバーであるが、低い音域を担当する特殊なモリン・ホールに加え、ヨーチン、ヤタッグ（モンゴル箏）、フルート、パーカッション、歌手などもメンバーとして参加している。

●さまざまな伝統楽器

モリン・ホール以外の伝統楽器としては、ヤタッグ、ヨーチン、ショドラガ（三弦）、リンベ（笛）などがある。モンゴル国では、ヤタッグを朝鮮民主主義人民共和国製

のカヤグムで代用することも多い。ヨーチンは中国の揚琴と同様に、台形のテールブル状の共鳴箱の上に弦を張り、スティックで弦をたたく楽器である。これはモンゴル国で生産していたが、最近では中国製のものも使用している。中国製のものは、北京などで作られている弦の数が一〇〇本以上ある大型のものである。ただしモンゴル国で使用する場合には弦の排列を工夫し、モンゴル楽曲の演奏に適するようにしている。ショドラガは多くは中国

製を使用している。リンベはモンゴル独特の楽器で、構造・運指法ともに中国の笛とは異なっている。

内モンゴルなどでは、ヤタツグは中国の箏に押され気味である。これは中国の古箏の楽器改良が進み、ヤタツグがそれに準じる形で改良された経緯にもよるようだ。若干の優秀な演奏者がいるが、モリン・ホールのようにある面ではモンゴル国をリードするような動きを見ることはできない。

ショドラガについても多少似たような傾向があるが、内モンゴルのオルドス地方でこの楽器の演奏が盛んであったことと、演奏技法が漢族の三弦とかなり異なることもあり、モンゴル音楽の独自性を打ち出すことに成功している。しかし、演奏者数、その養成状況はモンゴル国と比べ手薄な感じである。

リンベについては中国の笛子(ディーズ)を使い、モンゴル曲の第一人者とされる演奏者も漢族である。

### ●伝統音楽

モンゴルの音楽では、実は声楽が基幹をなしている。

この点は日本の民族音楽とよく似た状況であると言える。モンゴルの音楽では、ビート感のはっきりしているボギ

ノ・ドーと、はっきりしていないオルティン・ドーという対立概念がある。ボギノは「短い」、オルトは「長い」、ドーは「歌」だから、ボギノ・ドーは「短い歌」、オルティン・ドーは「長い歌」と訳される。しかしドーはたんに歌というだけではなく、音一般も指す言葉である。したがって声楽曲だけではなく器楽曲に關してもオルティン・ドー、ボギノ・ドーという概念が適用される。

モンゴルでは、オルティン・ドーが発達した。オルティン・ドーの特徴は、ビート感がない、またはきわめて希薄であること、旋律中のいくつかの音が自由に引き延ばされること、装飾的な音が表現上重要な意味を持つことなどである。

オルティン・ドーの歌唱の際には、モリン・ホールが伴奏を務めることが多いが、モリン・ホールは旋律を多少変形し、さらに歌手と少しタイミングをずらす。つまり歌と伴奏は互いに前後する感じで音楽が進行していく。

各地でその土地独特のオルティン・ドーが伝わっているが、モンゴル国の大部分、中国領内のシリングル、フルンボイルなどの地方では、とくに発達している。

モンゴル国ではノロブバンザドという素晴らしい歌手

が、オルティン・ドーの伝統の継承に大きな貢献をしている。すでに六〇代半ば（一九九六年現在）になっているが、卓越した歌唱能力はいまだに健在である。ただ、彼女の存在があまりにも偉大であったため、モンゴル国のプロの歌手の演唱法が、多かれ少なかれ彼女の歌い方に似たものになってしまったという問題点を指摘する声もある。

中国領内では一九四〇年代まで存在した王府、つまり地方宮廷の歌手であったハージャブ（男声）やボインデルゲル（女声）が活躍した。これらの歌手が後輩を育成し、ラスロンなどの名歌手が生まれた。また内モンゴルのアバガ地方などに伝わっていた合唱形態のオルティン・ドーであるチョーリン・ドーは、プロとしては一時ハージャブのほかは歌う人間がほとんどいなくなってしまうが、最近ラスロンなどがとり上げ、再び脚光をあびるようになっていいる。

### ●ホーミーの伝承

モンゴルの伝統音楽として有名なものに、ホーミーがある。ホーミーは簡単に説明すれば、低いくなるような声を発し、その倍音を身体に共鳴させて、高い笛のよう

な音を作る技法である。舌の位置などを変化させることにより、基音の中どの倍音を強く共鳴させるかコントロールし、メロディを構成する。

ホーミーは、モンゴル国のいつたえによれば、ホブト県チャンドマニ地区の伝統であるという。発祥地についてこの説が確認されたわけではないが、西部地区の芸能であったことは確かであろう。モンゴル国では、ステージ上で各地の民謡をホーミーの技法で演唱することが一時はやったようであるが、現在は西部地区に伝承されてきたのに近い形で演じられることが多くなっている。

内モンゴルにはもともとホーミーは伝承されていなかったが、内モンゴル歌舞団がウランバートルからホーミーの歌い手を招き、短期間の集中レッスンをおこない、以後ステージ上で演じられるようになった。現在内モンゴルでホーミーをレパートリーとする演奏団体は、内モンゴル歌舞団およびオールドス歌舞団である。

これとは別に、新疆ウイグル自治区アルタイ市郊外のハンダガード地区にもホーミーが伝えられていた。こちらの伝承によると、ホーミーの正式名称はホーロイン・チョールであるという。ホーロイン・チョールとは喉の

チョールという意味である。チョールとは、いくつかの音を同時に重ね合わせるという音楽上の概念であり、ホーロイン・チョール、チョーリン・ドーなど全部で五種類のチョールがモンゴル音楽に存在するとされている。

ハンダガードでのいいつたえによると、ホーミー（ホーロイン・チョール）はハンダガード周辺からモンゴル国ホブド県に伝えられたというが、研究者にはあまり認められてはいない。ハンダガード地区のホーロイン・チョールについては、最後の伝承者が他界してしまったという情報もある。

モンゴル国から見て西北の方向にあるロシア領トゥワ共和国にも同様のものが伝えられており、技巧面ではむしろトゥワの方が発達している。トゥワ民族は文化面でモンゴルと非常に近い関係にあり、一時はモンゴル国に属していた。

### ●最近の音楽と音楽家たち

モンゴル人の間にも、外来のポップス、流行音楽などが大量に流入している。若者が新しく紹介された音楽に飛びつく現象は、世界各地に見られることであるが、総じて言えば伝統音楽はいまだに多くのモンゴル人に愛さ

れていると言つてよいだろう。また、モンゴル国では、ポップス風の曲にモリン・ホール、オルティン・ドー、ホーミーなどがとり入れられることもある。日本では洋楽が日本人の感覚に受け入れられやすいように変形され、演歌などというジャンルが成立したが、モンゴルでも同様の現象が進行中であると考えられる。

中国領内では、北京に在住するテンゲルという流行歌手が成功を収めている。彼が歌つた「私はモンゴル人」は、モンゴル国の詩人ナツァグドルジの詩に自作のメロディをつけたもので、民謡とほとんど同じ感覚で歌われるようになった。

モンゴル国では体制の変革により、音楽家の置かれる状況もかなり大きく変動している。ウランバートルには国立民族歌舞団などがあり、各アイマグでも公立の歌舞団が活動している。私立の演奏団体も活動を始めたが、こちらの方は歴史が浅いこともあり、今後の動向は分からない。プロの音楽家の生活は、一九九二年前後は、社会の混乱によりかなり厳しかったようであるが、九四年頃からは安定を回復しつつあり、中流程度の生活は確保できるようになったという。

モンゴル音楽ディスコグラフィ― (国内版)

○超絶のホーミー〜モンゴルの歌 (キングレコード KICC5133)

モンゴル国で最高峰のオルティン・ドー歌手、ノロブバンザドのオルティン・ドーとホーミーをカップリングしたCDである。ノロブバンザドの歌の迫力には圧倒されざるをえない。一方、ホーミーの歌い手であるガンボルトも一流の演唱者であるが、このCDで演唱されているのは有名なモンゴル民謡であり、本来ホーミーで演じられたものではない。

○草原のチェロ〜モンゴルの馬頭琴 (キングレコード KICC5135)

空前のモリン・ホール演奏者チ・ボラグの独奏集である。モリン・ホール演奏の可能性を示した一枚といえる。

○草原の叙事詩〜モンゴルの「ジャンガル物語」 (キングレコード KICC5165)

さまざまなジャンルのモンゴルの伝統音楽を収録したCDである。聴く機会の少ないオールドス地方のオルティン・ドーも収録されている。上記のチ・ボラグもオルティン・ドーの伴奏をつとめている。チ・ボラグは使われることの少なくなった、5度調弦法で伴奏をしている。貴重な一枚である。

○バイラルラー (あ・り・が・と・う) モンゴルの調べ (日本クラウン FWCR-1002)

モンゴル国の器楽演奏とノロブバンザドの歌をバランスよく収録している。モンゴル国の民族音楽の雰囲気を知るのによい1枚である。

○草原の巨匠たち〜モンゴルの歌 (キングレコード KICC5177)

モンゴル国の音楽を知るための決定版とも言えるCDである。ノロブバンザドも演唱している。ホーミーも西モンゴルの伝統に近い形で演唱している。

音楽関係の著作権の意識確立も本格化しつつある。ジャスラック (日本音楽著作権協会) も代表をモンゴル国に送り、交渉をおこなった。モンゴル国の歌手の歌ったオルティン・ドーのマスターテープが、ヨーロッパで本人に無断で伴奏がつけられ発売されたので、トラブルになっ  
ているという情報もある。

中国領内のモンゴル音楽の状況をみると、政治体制は安定を保っているが、社会の変動期にあることには変わ

りがない。音楽家の地位・生活に国家が手厚い保護を加える状況は、過去のものとなった。音楽家の中には、生活のために商売などを始め、実質的に音楽活動から遠ざかった者もいる。音楽著作権については中国国内で著作権が重視されはじめたこともあり、その整備のための努力がなされているが、いまだ混乱期にあると言わざるをえない

# 私の人生は、モンゴルと日本の関係そのものよ

サロール

小長谷有紀

## ●モンゴルのおしん

彼女の名はサロール。彼女の名を冠したホテルの二階に彼女のオフィスがある。モンゴルで初めて私企業としての旅行会社を創設したサロール。彼女の席の背後には、チンギス・ハーンの肖像が掲げられていた。

一九五四年三月八日生まれ。三月八日といえは、マルタとよばれる国際女性デーである。かつて社会主義諸国では重要な祝祭日の一つであった。

「私の誕生日はいつも盛大に祝われてたもんだけど、もうなくなっちゃったのよね」

そう笑いながら、彼女は自分自身の長い長い物語について語りはじめた。まるで「モンゴルのおしん」のような、その艱難辛苦かんなんしんくに満ちた歩みを語りはじめた。

生まれ故郷はバヤンホンゴル県の中心地。県庁所在地にある一〇年制学校で、父は校長を、母は数学教師を務めていた。七人きょうだいの三番目であった。両親の勤

務する学校に、彼女は九歳で入学して一九歳で卒業した。それは、画一的な教育制度が地方にも普及してきた当時の、ごく普通の子どもたちの生活であったといえよう。

卒業時の試験の成績によって進路が決められる。モンゴル唯一の国立大学（総合大学）へは、各地方からほぼ均等に入学者が選抜されていた。ロシア語をのぞいて優秀な成績であった彼女は、モンゴル国立大学のモンゴル語学科に入学することになる。一九七三年秋のことであった。

「モンゴル語の先生になろうと思ってた。それが両親の希望でもあったしね」

ところが、予期せぬことが起こる。一九七二年にモンゴルは日本との国交を樹立したが、それから三年後の七年から国立大に日本語コースが設置されることになったのである。

「大学三年も半分終わった冬休みにね、帰郷して二

日遅れでウランバトルに戻って来ると、日本語コースに入れられちゃったのよお」

中国語コースに五人と日本語コースに五人が決められてしまっていたという。それまで自主的に日本語を勉強するサークルに参加したことはあったものの、まさか本格的に日本語を専修するようになるうとは思っていませんでした。

「私よりも母がびっくりした。ちょうど母と一緒にウランバトルへ来ていたから、母は学部長にかけあった。母はいやだったのよ。日本語を学ぶなんて危険だと思っただけでしょうね」

学部長と知り合いだった彼女の母は、しかし逆に学部長に説得され、納得し、娘の日本語コース進学を承諾した。

「二人のあいだでどんな話をしたのか、その場にいなかったからたしかじやないけど、母の言ったことから想像するとね、モンゴル語を専攻すれば、しょせん故郷に戻るしかないでしょ、いなかの子が町にとどまるのはとても難しい。日本語ならいろんなチャンスが開けるって、大方そんな話だったろうと思う。もう戦争の



サロール。

時代じゃないんだから、しっかり勉強すればいい、母はそうも言った」

こうして、彼女は思いもかけず日本語コースの専攻生となった。それが期待されていた結果なのか、それともいわば人身御供だったのかは、いまではわからない。たしかなのは、自分自身で選択する余地はなかったということである。

彼女が四年生のとき、日本から初めての交換教授や留学生がやってきた。地方の出身だった彼女は学生寮で暮らしており、留学生の世話をするという任務を与えられ、留学生たちとの会話を通じて日本語の学習に励んだ。

#### ●日本語との格闘

教科書も何も整っていなかった時代だから、日本語の勉強は容易ではなかった。辞書は日露辞典と露蒙辞典を二重に利用する。

「一文訳すのに、どんなに時間がかかったことか。二つの辞書のあいだで単語が消えていくのよ。日露辞典で調べても、露蒙辞典に載ってなかったり、日露辞典に載ってなかったりで。だからもうさっさとあきらめた。辞書ではなくて、会話で勉強することにした」

旧ソ連で日本語を学んだ若い教師の発音は、いまから思えばとても奇妙なものだったという。不十分な環境のなかで、彼女たちはとにかく日本語を学んだ。そして、この国で最初の日本語コース卒業生となった。

一九七七年に大学を卒業した時点で、彼女はジョールチンに配属された。ジョールチンとは当時、貿易省に属していた国営旅行社であり、旧ソ連のインツォリストに相当する。またもや選択の余地のないまま、旅行社の通訳になったのであった。

同級生のなかには、大学の講師に配属された人もいれば、何の仕事も配分されなかった人もいる。日本語コースを専攻した学生の未来は決して容易ではなかったのである。彼女自身は最悪の事態をまぬがれたとはいえ、やはり厳しい道のりが待っていた。

「夏にしか日本人客は来ないでしょ。七月と八月の二カ月間にせいぜい三グループしか来ない。日程が重なったりするから、結局ひと夏に一つのグループにアテンドするだけ」

彼女の初仕事は一九七七年の七月七日だったという。七が四つも並んだ初仕事は、ツェベグマーさんと一緒にやった。司馬遼太郎の『草原の記』に登場する初老の女性である。数奇な運命をたどったプリアート人であり、き

わめて流暢な日本語を話す。

「ツェベグマー女史につきしたがって仕事をしながら、ああ、いつになったら彼女のように話せるのかなあってうらやましく思った……。いつになってもできはしないことだったわねえ……」

一年に一度しかお呼びがかからないという職場環境は相当に苦しかったに違いない。

「みんなから悪口をいわれる。本業がないもんだから、秋の労働にまっさきに出されてしまおうわけ」

秋の収穫期になると、国営農場の労働力不足を補うために、首都から大学生や労働者がかりだされた。農場でジャガイモやコムギなどの収穫を手伝うのである。日本語通訳である彼女は、職場から率先して農場へ放出される運命にあった。通訳として雇用されたものの、ほとんどの時間を通訳以外のことに費やしたのである。

就職して一年後、彼女は三カ月間モスクワに滞在し、旅行専門学校で学んだ。

「ロシア語が苦手だったから、行きたくなかったのに、命令だからしかたなかった。聞き取りはさっぱりダメだけど、読み書きなら何とかなるから、隣の人のノートを写させてもらって勉強した」

またしても彼女にとって選択の余地なき指令だったが、

結果的にこのときの勉強が現在の彼女の仕事に大いに役に立っているという。

### ●通訳の生活

モスクワから戻ってきた翌年の夏、待望の通訳の季節がめぐってくる。社長の命令でさっそく日本人に同行してウランバートル市の西北およそ二〇〇キロメートルにあるアマルバヤスガラン寺院へ向かった。現場に到着して驚いたことに、布団は持って来たかと問われた。彼ら日本人はただの観光客ではなく、ユネスコの依頼を受けて寺院の修復にやってきた技術者だったのである。ここに二カ月滞在するという。

「そうとは知らないもんだから、大慌てで人から布団を借りてね、九月末までずっと通訳をした」

日本人が帰国してしまうと、彼女は再び失職同然であった。ジョールチン旅行会社は、定員オーバーであるとの理由で、彼女を文化財保存修復センターに譲ろうとした。しかし、ユネスコの仕事はその後ヴェトナム人がひきつぐことになっており、日本語通訳はさしあたって必要がない。とても就職できる見込みはない。結局、どちらの職場から見放されそうだったところ、カシミア工場での通訳の仕事を得ることができた。

一九八〇年の夏のこと。日本がノモンハン事件(モン

ゴルではハルハ川戦争とよばれる)の賠償に代えて援助することになったカシミア工場が建設を終えようとしていた。そろそろ開業に向けて技術指導に日本人がやってくる。そこで通訳が必要だったのである。

電気関係の技術者が来れば、電気関係の専門用語をマスターし、織維関係の技術者が来れば、その専門用語をマスターする。こうして彼女は次々と変わる要求に応じて、各種の日本語を習得し、通訳に徹した。

約四年間そんな調子で通訳をしていたが、日本人が帰国してしまつた八四年の四月から、ぼったりと仕事がなくなつた。

「今もそうだけどね。日本人が来なければ仕事がなくなくなる。私の人生は、モンゴルと日本の関係そのものよ」

### ●失意の時代

このとき、彼女にはすでに二人の子どもがいた。一人めの長男は、大学生のときに産んだ。当時のモンゴル国立大学では子持ちの学生は決して珍しくなかった。女子大生の大半が子どもを産んで地方の実家に預けていたといつても過言ではない。彼女もまた故郷の母に長男をあずけていた。やがて夫とは離婚し、八二年に二人めの長女を未婚のまま産んでいた。

カシミア工場での四年間、母親休暇といわれる有給休

暇を一度も取らず、休まずに働いたので、工場長がその労をねぎらおう、と申し出たという。

「通常なら一カ月の休暇であるところを、ほうびとして一カ月増加して二カ月の休暇をやるうと言われた。もう私はすっかり有頂天になって、さっそくバヤンホンゴル県の父母のもとに帰ったのよ」

母親休暇の一カ月が過ぎた頃、彼女の母親はひどく心配したらしい。さっさとウランバートルに帰るように促す母親に、彼女は特別長期休暇であることをとくとくと説明したのだった。ところが……。

「二カ月たつて戻ると、みんなが私の顔をみて、あーらサロール、あんた何してんの、クビになってんのよ、つて言うもんだから、そりやもう仰天した」

不当解雇として裁判所に訴えようとしたが、告訴は解雇の日から一カ月以内と決められていた。二カ月の休暇を特別にあたえると言われたその日の日付で解雇されていた彼女は、まったくのところ騙されたとしか言いようがない。人民革命党の審判をおおぐために奔走してみると、とりあえず仕事をくれるという。しかし、その仕事は、どうやら料理人のようで、結局ひきうけることはなかった。それで半年ものあいだ、本当の無職に陥った。

「社会主義が機能していた当時、六カ月無職であるとい

うことが、どれほど不安だったことか。もう将来、年金はもらえないってことだから」

見かねた知人が、再び旅行会社ジョールチンで働けるようにしてくれた。一九八五年七月のことである。しかし、もはや通訳としてではなかった。ホテルの二階の鍵番としてである。給料が安いこともさることながら、とても大学卒業生の勤める職場とは思えない。

「それはとても恥ずかしいことだった……」

国立大学日本語コースの第一期生は、こうして常に逆風にさらされながら、日本とモンゴルの国際関係をそのまま体現するような人生を歩んでいた。

彼女にはじめて追いつく風が吹いたとき、モンゴル国そのものが生まれ変わろうとしていた。

### ◎三五歳の留学生

彼女は大学を卒業してからずっと、日本への留学願書を書いてきた。しかし、毎年さまざまな理由によって書類選考の段階ではねられる。いわく、三年の勤務経験がない、女性である、夫がない、党員でない、などなど。「私のように上から引っぱってってくれる人もいなければ、下から支えてくれる人もいない人間には、なかなかチャンスがない」

彼女には、引き立ててくれるようなトップクラスの知

り合いがいなかった。遊牧民の子弟ならまだしも下から支えることができるという。肉や乳製品を買い、それなりの便宜をはかってもらうことができるというのだ。しかし、彼女の両親は地方の学校教師であり、遊牧民のような融通もきかないのであった。すでに三〇歳になっていた彼女は、日本への留学をなかばあきらめもしたらしい。しかし、一九八九年の四月に彼女は東京へ留学することになった。もう三五歳だった。

「その年の応募者に競争相手がいなかったんでしよう。トップクラスの子弟がいなかったんだと思う。とても信じられなかった。ビザと航空券をもらって、明日行くという日になってもまだ信じられなかった」

その年の秋には彼女の長女がちょうど七歳になり、エリート学校への入学が決まっていた。

「私はロシア語で苦労したから、子どもにはそうはさせまいと思つて、ロシア語の先生を雇つて受験勉強させたりして準備してきた。ようやく第二三学校（ロシア語学校）への入学が決まったところだったから、子どものことを考えて、留学はやめようかとも迷つただけど、長年の努力がやっと実つたんだから……。そう思うと、やっぱり日本へ行くことにした」

東京へはモスクワ経由で向かった。それまでの留学生

が皆そうであつたように。成田に到着すると、彼女は民族衣装の内側にべっとり汗をかいていることに気がついた。これほど暑いところに二年も暮らすのかと思つてぞつとしたという。

「飛行場から東京外国語大学の宿舎まで車で移動するあいだに、何度も車からお金を支払うのを見て、なんと大変な国かと思つた。高速道路つてものを知らなかったから」

「宿舎に着くと、私の部屋番号は二階の一三号室なの。

一三という数字はロシアじゃ不吉な数とされているけど、モンゴルでは違う。いまじゃ一三が私のラッキーナンバーよ」

卵といつても色は違うし、ソーセイジといつても魚肉だつたりするしで、初めは種々面食らつたようである。

「血のしたたる刺身は、目をつぶつて一口食べてみる。そうしたら意外にいける。ヒツジの胸肉のように柔らかくておいしいものなのね。いまじゃもう平気よ」

こうして彼女は念願の日本で、日本そのものを肌で感じとつた。東京では地震も経験した。通訳時代に知り合つた人びとを訪ねて、日本各地を旅行もした。どんなに旅を重ねてもいつも東西南北がまるつきりわからなかつたという。モンゴルなら、どこへ行つてもゲル（天幕）

さえ見れば、南東に戸口を向けて立っているから、方向は直ちに了解できるのに、日本にはそうした指針がないからである。そして、日本はどこへ行ってもうるさく感じられたという。

「静かな場所というのがないでしょ、日本には。私の故郷バヤンホンゴルは、ゴビの一角にあって、そりゃもう広々としていて、静寂がある。日本にいくと、とにかく遠くを見たくなくて……。海を見てほっとした」

ホームシックというほどではないが、他の留学生がするように彼女もまた留学中に一時帰国した。東京から新潟へ飛び、そこからハバロフスク、ウランウデ、イルクーツクを経由して、合計五回飛行機を乗り換えてウランバートルに戻った。一九九〇年三月、それは民主化運動がちょうど盛り上がりを見せていた頃である。

「まるで、別の国に来たみたいだった。親戚や知人からいったい何があったのかを詳しく聞いた。ストライキもわざわざ見に行った。日本で自由の意味を体験してただけけど、故国がそんなふうに変わるとは思ってもみなかったもんだから」

日本へ再び戻ってからというもの、彼女はさまざまな文化交流に尽力する。少女歌手オヨナーが日本でデビューしたり、NHK紅白歌合戦に出場したりしたのも、彼

女の助力のためのものである。モンゴル航空のチャーター便を名古屋へ飛ばし、初めての日本直行便をお膳立てしたのも彼女であった。コネもカネもない彼女は、ひたすら根気と真心によっていずれも前例のないことを成し遂げてきたのである。

#### ●旅行社の創設

国営旅行会社ジョールチンがこれまで独占してきた観光業界に風穴をあけたのも彼女である。モンゴルで最初の旅行会社を作ったがゆえに、ジョールチンからは、さんざん痛めつけられもした。

たとえば、ウランバートル市内のバヤンゴル・ホテルには、サロールの客は泊めないと拒否される。そこで、社会主義時代にトップクラスの保養宿泊施設であったヌフトを利用した。労働省の管轄下で放棄されていたヌフトをホテルとして建て直したのである。ゴビのツーリスト・キャンプでは、すでに宿泊していた日本人観光客を追い出すよう、ジョールチンの社長がウランバートルからわざわざ電話をかけてきたこともある。そこで、ブルドにツーリスト・キャンプ（当初はオブルハンガイ県内、現在はアルハンガイ県内）を新設した。幾多のいやがらせが、彼女を本格的な経営者に導いたといってもよいかもしいない。

ツーリスト・キャンプにあったはずのゲルがそっくり盗まれたこともある。せつかくの利益は投資してこそ事業を拡大しようと訴えても、モンゴル人は普通、自分の取り分を要求するばかりである。最初に作った会社は、書類上の共同経営者が、税金逃れのために、彼女に会社を乗っ取られたと告訴した。これまでのビジネス上の困難を数え上げればきりが無い。

なかでも手痛かったのは、一九九五年夏のこと。日本のかなり大手の旅行会社が、椎名誠の映画『白い馬』の公開に合わせてファンを組織し、総計六〇〇人のツアーを送り込むというので、彼女は依頼を実現するために、全財産をつぎこんでバスを三台購入した。ハバロフスクの工場に直接発注したバスの輸入は、モンゴルで初めてのことだった。しかし、その夏、そこからは一グループも来なかった……。

それでも彼女はめげない。めげてはいられない。宿泊施設でさんざん苦労したから、とうとう自らホテルを建設した。ウランバートル市内で九六年八月から営業を開始している。利益をだましとられたり、企画を持ち去られたりしてきた彼女は少々お人好しなのかもしれない。しかし、彼女は断言する。

「どんなに大変でも約束は必ず守ってきた。ヤス・ビエルーレフ（骨に肉体をつける）するからこそ、信頼してもらえる」

いまでは多くの私営旅行会社がモンゴルにひしめいているけれども、固定客をもっているという点でサロールにまさるところはないだろう。

夏ばかりでなく、冬のモンゴル観光を作り出すことが経営上の課題である。そして彼女の夢は、生まれ故郷に日本式の温泉旅館を建てること。彼女は、日本とモンゴルの関係に翻弄ほんろうされながら社会主義を生き抜いてきた。そしていま、日本とモンゴルの関係を創りながら、資本主義の扉を押し開こうとしている。



●フオークロア

# 『白い馬』と『天の馬』

藤井麻湖

## ●馬をめぐる二つの映画

『白い馬』という映画がある。一九九五年放映された日本人監督（椎名誠）の現地ロケ作品だ。緑のまぶしい夏の草原。もうもうと白い排気ガスを出して進むバス。帰省して再会する家族。遊牧民の移動生活。馬乳酒作り。恋の芽生え。病気の兄の死。ナーダムに駆ける白い馬。夏の終わりと家族との別れ。一連の出来事が、心象風景のように淡く優しく生起しては消えていく。また、鳥や野生動物といった美しい自然のほか、一九九一年に訪れた民主化以降の生活の変化も、随所に織り込まれているのが注目される。

この映画とはほぼ同時期に作られた映画に、『天の馬』（原題は「天の生き物」というよく似た題名の作品がある。これはモンゴル人監督（オランチメグ）の作品で、NHKでも放映されたことがある。このストーリーは次のよう

なものである。

舞台は社会主義が崩壊し、市場経済へのプロセスとして家畜の私有化が進められる現代の遊牧地域、丈の低い草が疎らまばらに生えるゴビ地方である。物語は馬の私有化の場面から始まる。ダンザン老人の息子アランザルに、赤毛の瘦せた馬が割り当てられる。アランザルは不満だが、優れた馬の調教師であるダンザン老人は、その馬が駿馬であることを見抜き、水の神に感謝を捧げる。

老人は息子アランザルの交際している女性の子どもであるビリグン少年を、この馬の騎手にしてナーダムに出場させるため、訓練を始める。老人とビリグン少年の関係は実の祖父と孫の如く好い。

一方、馬の分配作業を担当していたダムチャーは、職権乱用で駿馬を手に入れて金儲けするつもりだったが実らず、調教師として名高いダンザン老人の眼鏡に叶った



バヤン・ウルギー県の馬群。

赤毛馬を買い取ろうとするが断られる。そこで策を弄し、アランザルを博打に誘い込んで騙し、赤毛を借金の手形に奪い取る。こうしてナーダムの前夜、赤毛の馬主はダムチャーに移る。

赤毛はナーダムで見事優勝するが、ダムチャーに連れ去られる。赤毛を失った老人と少年の嘆きを知り、アランザルは馬を取り戻そうとする。が、時すでに遅く、赤毛は国境を越えて売られていく。モンゴル側の国境で立ちすくむアランザルと少年。何度か少年のもとに戻ろうとあがく赤毛馬。強烈な夕陽のなか、少年は馬を見送りながら、重い喪失感を噛みしめる。

右に紹介した二つの作品は、どちらも馬を扱っているという点で共通しているが、印象はかなり違う。ここでは、モンゴル・フォークロアの紹介を兼ねて、この二つの作品で扱われているフォークロアを通してその背景を考えてみたい。

#### ●『白い馬』におけるフォークロア

『白い馬』で使われているフォークロアで、最も印象に残るのは、草原で主人公の少年に老人が馬頭琴で弾き語りしてやる場面であろう。こうした弾き語りをモンゴル

語でウリゲルト・ドー（民話のついた歌）と言う。このジャンルは元来おもに内モンゴルに存在していた語りの様式で、今は舞台芸術となっている。

この弾き語りは、日本でお馴染みのモンゴル民話「スーホの白い馬」であるが、実は、この話は当のモンゴル人には、ほとんど知られていない。この物語が日本に最初紹介されたのは、一九六七年であり、モンゴル語からではなく、漢語の翻訳である。原典となったのは、おそらく一九六二年に北京で出版された『中国民間故事選第一集』であろう。

スーホの物語は、馬頭琴の起源説話ともなっており、この点から言えば、モンゴルで比較的よく知られている「フー・ナムジル」という民話に、対応するように思われる。ただし「フー・ナムジル」には、封建領主は登場しておらず、階級闘争的なモチーフは含まれていない。だが、スーホの白い馬のように、愛馬が罪もなく殺されてしまうという悲劇から馬頭琴が生まれている点は、共通している。「フー・ナムジル」の物語は次のようなものである。

## ●「フー・ナムジル」の話

昔むかし、モンゴルの東端にフー・ナムジルという男がいた。彼は誰よりも歌を歌うのがうまかったので、その地方で名声を博していた。ある時、フー・ナムジルは兵役につくために、モンゴルの西の国境に行った。彼の上官は、ナムジルが歌を歌うのに長けているのを知って、軍務に従事させる代わりに歌を歌わせていた。

ナムジルはそのようにして三年間歌を歌ううちに、その地方のある美女と知り合った。ナムジルの兵役の期間が終わって、彼が故郷に戻るとき、彼女はジョン・ハラという馬を記念に彼に贈った。この馬は魔法の馬であった。ナムジルはその馬に乗って故郷に帰ったが、彼は故郷に帰ってからもこの馬に乗って、西の国境地帯に恋人との逢瀬おうせのため通うようになった。ナムジルがこの馬以外の馬に乗らず、またどこからか馬群を追ってくるのを人びとは不思議がったが、その事情は知られないまま三年が経った。

さて、ナムジルの家の近所に、ある金持ちの家があった。この家の娘は、常に人のあら探しをして災いをもたらす女だったが、この娘がナムジルのおこないが尋常でないことをかぎつけて、彼を陥れようと思うようになった。

た。実際ナムジルは、毎日夕方に西の国境に出かけて、夜戻ってくるたびに馬群を追ってくるのであった。そして戻って来ると、翌朝自由に放してやるまで馬を馬つなぎに繋いでおき、家に戻って休んだ。ある時、この金持ちの家の娘は、夜中に馬の蹄ひづめの音を聞きつけて、馬つなぎに居るジョノン・ハラにそっと近づいてみると、胸の脇から魔法の翼が生えていた。娘は裁縫のハサミを懐に忍ばせてやってきて、その翼を切った。ジョノン・ハラは、そのためにまもなく死んでしまった。

夜が明けてナムジルが馬つなぎの場に来てみると、馬はすでに息絶えていた。ナムジルは亡き馬を思い、嘆き悲しんだ。ナムジルはある日、美しいジョノン・ハラの頭を木で形作り、綺麗に細工した頭に長い竿をつけて、亡き馬の皮で共鳴箱を作り、その美しい尻尾で弦を張り、樹液を塗りつけて音を出してみた。すると、ジョノン・ハラがいなく声、走る様子が音楽に再現されるのに気づいた。こうして、馬の頭のついた馬頭琴が初めて生まれたのである(『モンゴル民話』一九七八年より訳出)。

「フー・ナムジル」は、馬頭琴の起源説話の中で物語性のあるものの一つであるが、この話の原型は、愛馬が

死んで、そのたてがみや尾が風になびいて音を出している様子からインスピレーションを得て、馬頭琴を創るというものであったのだろう。実際に、このような主旨だけの伝説も存在している。

### ●歌の伝統

馬頭琴での弾き語りのほかに、『白い馬』では掛け合いの歌を歌う女たちが登場している。こうした掛け合い歌をモンゴル語でハルルツァー・ドー(関係・歌)と言う。モンゴル・フォークロアの一つのジャンルだが、現在舞台では演じられても、生活の中で歌われることはほとんどなくなった。

このほか、主人公の少年が歌を大人に披露する場面がある。モンゴルでは時々、郷愁を誘われるような、いわゆる子どもらしい子どもにお目にかかる。この映画では、そうした子どもに愛らしく歌わせてみたかったのだろう。だが、演出から離れて見ると、モンゴルで伝統的に歌というものは、子どもの文化ではなく、大人の文化に属しており、あの強烈な歌の空間を知っている者としては、この場面にやや違和感を持つ。実際興味深いことだが、歌だけでなく、モンゴル・フォークロア全体が、今でこそ

子どもを対象にするようになったが、むしろ大人の文化に長い間属してきたのであった。

映画で、少年に歌わせているのは、いわゆる民謡（アルディン・ドー）ではなく、最近の歌である。このように、作者不明の伝統的民謡ばかりでなく、ラジオで放送される個人の作品も、全く同じように流行している。これは今のモンゴルの歌文化の特徴である。歌うときは、一般に、一人が一節歌ってリードしたあと、その場にいるすべての人が続きを斉唱するというスタイルを取る。

### ●『天の馬』におけるフォークロア

次に、『天の馬』におけるフォークロアをみてみよう。ここでは、『白い馬』には現れないフォークロアのジャンルが登場している。ベレク・デンベルリン・ウグ、ユール（祝詞ウラフ）といったもののほか、ダーローという麻雀に似た札遊びのときに使う特殊ないまわしなどである。

ベレク・デンベルリン・ウグというのは、「さい先の良い言葉」という意味で、何かの仕事をしている人に会ったときにする一種の簡単な挨拶言葉である。ユールの短形式とも理解されている。遊牧生活をする人は今

でもよく使う。

映画では、「うまく縫えますように！」とアランザル青年が、ゲルの外で縫い物をするブリグン少年の母に声をかけている。ベレク・デンベルリン・ウグは、伝統的決まり文句である場合が多い。言霊思想ことばまの反映としてこのジャンルを解釈することがあるが、実際使用される場面では、相手の仕事の邪魔をしないようにして相手の仕事空間に入るときにおこなう配慮の表現といえるだろう。

ユールは、節をつけずに語る韻文であり、韻を踏むことが心がけられる。「祝詞」と一般に訳され、長短はさまざまである。ここでは、ダンザン老人が馬つなぎに「天の矢」なるお守りを結わえるときに唱えている。

獅子のように勇敢で、虎のように力強く

羽よりも軽く、矢よりも速く

困難を困難としないように

遠くを遠くのものと思わないように

ホライ、ホライ、ホライ

この場面は、やや民話風の演出がなされている。

ユールは幸運を願う祈りとして、結婚式で語られることが多い。現在ユールを言う人は減少し、書物から学んで語る人が多くなった。

ダーローというのは、小さな四角形の板に二―一二個穴のあいた六〇枚の札で遊ぶゲームである。このゲームはモンゴルではポピュラーで、遊び方もいろいろある。特徴は、札を取ったり、出したりすること、その札に特有の定型的言葉を言う点にある。この言葉は、行頭韻を踏んだ一対か二対の韻文で成り立っている。この特殊な言葉を「ダーローニー・ゴンシン（ダーローの称号）」と言う。

この札ごとに言う言葉は、一種類ではなく複数ある。これらの言葉の内容は、かなり謎に満ちたもので、モンゴル人はこれを隠喩的いんぐに用いることがあり、映画でもそのような用いられ方をしている。ゴンシンは、必ずしも定型句ではなく、類似表現でもよいし、ことわざを引いてもよい。

具体的に映画のダーローの場面における表現をいくつか挙げよう。アランザル青年が、後でしつべ返しされる

ことを知らずに、勝負に勝って、ダムチャーからご執心の栗毛馬をもらい受ける場面で、まさに勝敗を決するとき、アランザルは次のように言う。

おまえどころか 車も行かない

あなたどころか トラックも行かない 道だよ、ホ

ラ

こう表現することで、相手の札の出し方がまずかったことを誇らしげに指摘したのである。

望みは先に

額はこちらに

モンゴルでは勝負事に負けたときに勝者が敗者の額を罰として指ではじく仕草をする。要するにこの言葉で、「おまえさんには気の毒だが、おまえさんの負けだよ」と言いたいのである。

口を滑らせたら取り返しはつかないが

馬なら失つても取り返しはつく

これは日常よく使われる「口は災いのもと」という意味のことわざである。ここでは、勝負に勝ったアランザル青年が、敗者のダムチャーを慰めるために使っている。しかし、このことわざは物語の顛末を考えると、皮肉だ。なぜなら、アランザルは口を滑らせて家族にとって最も大切な赤毛の駿馬を、次の勝負でダムチャーに取られてしまうからである。そして、ついにこの馬を取り戻すことがない。口を滑らせた対象が馬なら、馬でも取り返しはつかない。

ことわざは、モンゴルでも一般に、教訓を垂れるために用いるものと考えられているが、実際に運用されている場面では、そうではないことが多い。映画においてもアランザル青年は、馬の配分をするダムチャーが人からは良馬を取り上げるくせに人には絶対ゆずらないのを、ことわざに託して悪態をつけている。

### ●生きるモンゴル・フォークロア

フォークロアの扱いを対照させると、『白い馬』と『天の馬』という二つの映画の基本的趣向のようなもの

が浮かび上がってくる。『白い馬』では今日舞台芸術として残っている弾き語りや歌を用いており、フォークロアを全体に「過去の遺産」として扱っている。ここにおけるフォークロアは、物語の要請としてではなく、「風景」を構成するための重要な「小道具」として存在しているのが特徴である。そして一見逆説的であるが、面白いのは、日本人のモンゴルに対して抱く一種独特の憧憬の眼差しに支えられたモンゴルの「風景」——それは曖昧なイメージでのみこれまで捉えられてきたと考えられる——を映画という視覚芸術を通して総合的に表現して見せた点であろう。

一方『天の馬』では、フォークロアはそうした「風景」を構成していない。それは物語に組み込まれており、人びとのいわば「現在形の自己表現」として存在している。むろん、そこになんら演出がないわけではない。だが、そこにさえモンゴル・フォークロアの感性が流れこんでいるように思うのは、おそらく私一人でないのではなからうか。

## 文化英雄チンギス

### 二木博史

モンゴルの伝統的な婚姻儀礼では、花婿側と花嫁側が韻文のかけあいをおこない、作詩のわざをきそいあつた。そのテキストの中にはチンギス・ハーンの名がしばしばあらわれる。

主チンギス・ボグド  
まつろわぬ敵をこらしめ



チンギス・ハーンと妃・王子たち。

民をひとつにし

偉大なる王の名をえ

ブルテゲルジン・セチェン

この麗しきおとめを

妃としてめとるとき

はじめてその名と干支えとを尋ねたり

(バリーン地方の婚礼祝詞)

チンギス・ハーンによって定められたしきたりは、花嫁の名と干支を問う規定だけに止まらず、花嫁側が花婿の矢筒に矢をいれてやる習慣、ウマにのって嫁入りした花嫁を数物の上におりさせるならわしなど、さ

まざまだ。

もちろん、この場合、実際にチンギスがしきたりを定めたかどうかは重要なのではなく、チンギスに婚礼規定のつくり手としての役割がわりあてられている点が目される。王チンギスは、その死後、シャマニズムの世界の守護神にかわった。

モンゴルの婚礼は、祖先の歴史を再体験する場、民族の記憶の甦よみがえりの場であった。いいかえれば、婚姻儀礼はモンゴル人の「神話」が語られる場であり、チンギス・ハーンは一種の「文化英雄」として登場した。

●モンゴル文字

# 文字の復活か、伝統の復活か

松川 節

●モンゴル文字の伝統

一九九〇年以来、民主化の進むモンゴル国では伝統文化の復興が盛んにおこなわれている。なかでもモンゴル文字の復活とその公用化運動は、半世紀近くもお仕着せのキリル文字（ロシア文字）を使うように強制されてきたモンゴル国民にとって、自らの伝統文化を自らの文字で記録する、またとない機会として広く歓迎されたと見受けられた。しかし、半世紀近くの断絶を埋めてモンゴル文字を復活させることには、予想以上の困難がともない、一九九四年ごろから公用化への動きには騒りさえ見えはじめている。

いったい、彼らが復活させようとしているモンゴル文字は、いかなる起源と変遷をもつものなのだろうか。まずはモンゴル文字の歴史をふりかえってみよう。

一三世紀の初め、チンギスがモンゴルを統一する過程

でナイマン部を攻略した際、ナイマン部の宰相であったタタトンは、手にしていた伝国の印璽をチンギスに引き渡し、そこに記された秘密——文字が国家組織の道具であるということ——を明かした。モンゴル人と文字との最初の出会いである。

このとき伝わったのはウイグル文字であり、縦書きで行は左から右に送られた。モンゴル人はこの文字を使ってモンゴル語を表記しはじめた。その最初の証拠となるのが、通説では一二二四年に成立した、「チンギス石」と呼ばれる有名な碑文である。

その後、一三世紀半ばすぎに、モンゴル帝国の第五代皇帝フビライは中国に元朝を建ててに当たって、新たに「蒙古新字」（あるいは「蒙古字」）、すなわちパスパ文字を公布し、ウイグル文字の使用を禁止して、一切の公事をパスパ文字でおこなうよう義務づけた。パスパ文字は、

チベット人仏教僧パスバがフビライの要請にしたがって、チベット文字をもとにしてつくったものであり、縦書きで行が左から右に進められる点はウイグル文字と同じだが、字形はまったく異なる。



チベット文字  
ウイグル文字



モンゴル国で発行されているモンゴル文字新聞「フン・ビチグ(人文)」。

元朝治下、ウイグル文字は、公の場で使うことを禁止されたが、民間で、とくにモンゴル仏教の普及のために使われ続け、一四世紀になると、いくつかのモンゴル語訳仏典がウイグル文字でつくられるようになった。このころに活躍したのが、チョイジ・オドセルという仏僧で、彼は仏典のモンゴル語訳に携わっただけでなく、ウイグル文字モンゴル語の正書法と文法を確立した最初の人物であったと見なされている。

ところで、一三—一四世紀のモンゴル支配時代にモンゴル語を表記するために使われたウイグル文字を「ウイグル式モンゴル文字」と呼ぶことがあるが、当時は単に「ウイグル文字」と呼ばれており、「モンゴル文字」といえばパスパ文字を指していたことに注意を喚起したい。一四世紀半ばすぎ、元朝が崩壊するとともにパスパ文字はすたれ、ウイグル文字の伝統だけが細々と伝えられていった。

一六世紀後半、ゲルク派のチベット仏教がモンゴルに伝播し、再び仏典の訳経事業が盛んになるとともに、ウイグル文字を改良した「アリガリ文字」がつくられた。この改良文字は、モンゴル語自体の表記方法を改良する

ためではなく、モンゴル語訳仏典にあらわれる、サンスクリット語やチベット語からの音写語を正しく表記するために、チベット文字の字形を借用しつつ文字数を増やしたものである。このころから一八世紀前半にかけて、モンゴルでは仏教文化が開花し、モンゴル語訳大蔵経をはじめとしてさまざまな仏教文献がウイグル文字で書かれ、正書法や文法も整備された。この時期は、文字と文法の双方における規範化が完成したので、モンゴル文字史のなかで「古典期」と位置づけられ、文字の名称も、旧来の「ウイグル文字」に代わって、「モンゴル文字」と呼ばれるようになった。

同じ時期、西モンゴルではザヤ・バンディタという仏僧が、やはりモンゴル語仏典作成のために「トド文字」（明らかな文字という意）を考案していたし、東モンゴルでは、モンゴル文字を改良して、満洲文字がつくられた。

その後、二〇世紀初頭にブリヤートの仏僧アグワン・ドルジェフが、同じくモンゴル語仏典作成のためにモンゴル文字を改良して「ワギンダラ文字」をつくったが、普及はしなかった。一九一一年の清朝の崩壊を受けて自治宣言をしたボグド・ハーン政権期と、一九二一年の社

会主義革命を経て一九二四年に成立したモンゴル人民共和国でもモンゴル文字が公用文字として使用された。このころから、ソ連では民族文字をラテン文字化する試みがなされ、それに同調してモンゴル文字もラテン字化に向けてさまざまな試行がなされていたが、その進行中の一九四〇年、ソ連の政策転換をうけて、突如キリル文字への移行が決定され、伝統あるモンゴル文字の使用は禁止されたのである。

#### ●民主化とモンゴル文字復活運動

一九八九年一二月、ソ連のペレストロイカの影響をうけて始まったモンゴルの民主化運動は、政治・経済・社会のあらゆる面で改革と刷新を目指したものであり、同時に、ソ連の強い影響下で禁止されていたモンゴルの伝統文化を復活させようとするものであった。なかでも、多くの国民が支持したのは、一九四六年以来、ソ連の押しつけによって国家の公用文字とすることを余儀なくされてきたキリル文字を捨てさり、伝統的なモンゴル文字を復活させようという運動である。これを受けて、一九九〇年夏の初の総選挙によって誕生した与野党連立政権は、はやくも伝統的モンゴル文字の公用化を決定し、一

九四五年までの五年間、公用文字としてキリル文字とモンゴル文字を併用し、その後完全にモンゴル文字に移行すべく、環境の整備に乗り出した。

こうして、初等教育レベルでのモンゴル文字教育、社会人へのモンゴル文字再教育プログラムの実施、教師の養成、教本の作成と出版、指導要領の開発などが国家計画として実施された。モンゴル文字は小学校一年から教えることになったが、当初はモンゴル文字を教えられる教師が不足していたため、科学アカデミーの研究員までが動員され、教壇に立つ必要があつた。教授用テキストの不足も深刻な問題だった。日本から無償援助として、モンゴル文字の教科書やモンゴル文字ワープロが送られたのはこの時期である。

モンゴル文字の公用化計画は順調に進んでいるように見えたが、五カ年計画の四年目にあたる一九九四年七月に国会で経過報告が検討された結果、モンゴル文字公用化のための環境はまだ整備されていないため、当面はキリル文字で国事と教育をおこなうことが決定された。そして一九九五年六月、政府が上程した新しい「国家モンゴル文字計画」が国会で批准され、新計画に基づいて一

九九五―二〇〇五年の一〇年間、モンゴル文字を準公用文字と定めつつ公用化を目指すことになったのである。

私の手元にある、この「国家モンゴル文字計画」の小冊子は、その目的にふさわしく、まずモンゴル文字とキリル文字によるモンゴル語で同じ内容が記され、その後英語訳が付されている。しかし具体的な決定事項を見ると、上述のようにモンゴル文字の公用化を先送りすることのほか、一九九五学年度入学の小学生からは、まずキリル文字モンゴル語を教え、モンゴル文字は三年生から教えるとしている。事実上、モンゴル文字公用化計画は大きく後退し、キリル文字の効用が再認識されたのであつた。

その後も、たび重なる政権交代により、国家レヴェルの文字政策を打ち出すだけの合意に達することができないというのが実情である。

#### ●文字改革における問題点

モンゴル国における文字改革が頓挫している理由は、経済混乱が長引き、モンゴル文字公用化の環境整備が整っていない点と、自然科学系の人びとが、「縦書きのモンゴル文字は、近代科学普及に適さない」として根強く

反対し続けている点にある。

ここで不審に思えてならないのは、文字改革推進派が、自然科学系の文章を縦書きのモンゴル文字で表記できるということを、一向にアピールしないことである。現在モンゴル国内で、モンゴル文字で発行されている定期刊行物は、どれも人文・社会科学系のものばかりで、自然科学系のもは一つもない。そもそも、数式や英数文字を多く含んだ自然科学系の文章をモンゴル文字で表記する方法については、中国の内蒙古自治区において長年にわたって研究されており、内蒙古師範大学理系学部においては、高等教育のカリキュラムが全てモンゴル文字モンゴル語でおこなえるように編成され、教科書も実際につくられている。その背景には、内蒙古自治区では全ての公文書の作成と公教育を、漢語とともにモンゴル文字モンゴル語でもおこなえる環境をつくるという国家政策がある。例えば、一九九六年夏、モンゴル文字をコンピュータ処理するための文字コードの標準化に関する国際会議が北京で開催されたのも、その姿勢のあらわれである。

モンゴル国の文字改革推進派の人びとが内モンゴルの

人びとと経験を交流しあえば、縦書きのモンゴル文字で近代科学を普及させることも十分可能はずだが、実際には、数学や物理学、あるいは化学反応式といった自然科学系の数式表記を縦書きのモンゴル文字に持ち込むことに抵抗を感じているようである。彼らは、一九四〇年に廃止されたモンゴル文字を公用化することよりも、むしろ、そこに込められた伝統文化という「思い入れ」を復活させようとしているのではないだろうか。

#### ●つくられた伝統

モンゴル文字の伝統が語られる際には、その起源が民族の英雄チンギス・ハーンの時代にあることがふつう強調されるが、モンゴル国のある学者は、モンゴル人はチンギス・ハーンの時代にウイグル人から文字を借用したのではなく、さらに古く、六〇七世紀に、ソグド人から直接借用したのだと主張する。

通説では、ソグド人の使っていたアラム文字系のソグド文字が、六〇七世紀にウイグル人によって借用され、このウイグル文字が一三世紀前半にモンゴル人によって借用されたとなっているが、この新説は、ウイグル人とともにモンゴル人もいっしょに、六〇七世紀にソグド人

から文字を借用したというのである。

しかし、この新説を証明する史料は見つかっていない。現存するウイグル文字モンゴル語資料で、一三世紀を遡るものは一つとして存在しない。また、モンゴル語を用



1240年のウイグル文字モンゴル語碑文。現存するモンゴル語資料で年代比定されたうち最古のもの。

いる集団が六〜七世紀に存在していて、仮に彼らがソグド文字を借用していたとしたら、一三世紀前半のモンゴル語資料にもソグド文字の面影が見られるはずだが、実際に見られるのは、ソグド文字からウイグル文字がつくられ、ウイグル語内部で独特の改変を経てからモンゴルに伝わったことを示す証拠ばかりである。これらの証拠と、チンギスの西征によってウイグルとモンゴルの交流が活発化したという歴史背景を考えあわせれば、モンゴルにウイグル文字が導入された時期は一三世紀前半に限定される。

次に、最古のウイグル文字モンゴル語資料として名高い「チンギス<sup>スドリン</sup>石」の評価を問題にしよう。この碑文は、冒頭に「チンギス・ハン」の名が刻されているため、文字の伝統を民族の英雄に結びつけるものとして、常に最初に言及されてきた。一九九六年、民族文字の象徴であるこの碑石を、所蔵先であるサンクトペテルブルグのエルミタージュ博物館からモンゴルに返還させようという運動が起こったが、ロシア側は、この碑石が一九世紀初頭に東モンゴリアのロシア領から出土したことを根拠に、返還の必要はないとした。現在、ウランバートルの国立

図書館には、モンゴル文化基金によってつくられた碑石の複製が展示されている。

しかし、私の見解では、この資料はナシヨナリズムの象徴たりえない。冒頭に「チンギス・ハン」という文字はあるが、本文はチンギスに直接関わるものではなく、チンギスの甥のイスンゲを紀功したものであり、それゆえ成立時期も、チンギス在世中の一二二四年ではなく、その死後四〇年以上過ぎたフビライの時代、つまりイスンゲの晩年である可能性が高い。イスンゲは、モンゴル帝国の東方三王家の一盟主として、フビライ政権を支えた大立者であった。そのフビライと言えば、モンゴル帝国の都をモンゴル高原のカラコルムから中国に移し、「モンゴルを中国に売った」人物として、モンゴル国のモンゴル人の間ではきわめて評判が悪いが、最古のモンゴル語資料として彼らが珍重する碑石の内容が、実はフビライの腹心の部下を称えたものだと、皮肉である。

三番目に、正書法と文法の整備を問題にしよう。

一四世紀初頭にチョイジ・オドセルという仏僧がモンゴル語仏典を作成したというのは事実であり、彼の活躍は他の史料からも証明できる。しかし、チョイジ・オド

セルがモンゴル語文法書を著し、正書法を整備したとするのは、後代につくられた伝説であり、一八世紀前半に著された『ズルヘン・トルタ』という初のモンゴル語文法書が、権威づけのためにチョイジ・オドセルに仮託して書かれただけのことである。一四世紀にウイグル文字モンゴル語の正書法や文法が整備されていたという証拠はどこにも存在しない。

こうして、現在のモンゴル国に広まっている「伝統的モンゴル文字」に込められた思い入れをはぎ取っていくと、現代に伝わるモンゴル文字の伝統は、一七―一八世紀以降につくられたものにすぎず、一三―一四世紀のモンゴル帝国時代の遺産とはおよそかけ離れたものであることがわかるのである。

モンゴル国における文字改革の現状は、現実としてモンゴル文字をいかに復活させるかという問題と、モンゴル文字に付随する伝統理念の復活とが混然一体となり、ゆらいでいるようにみえる。文字改革が頓挫しているのは、こうしたモンゴル人の今日的あり方のゆらぎが一因となっているように思えてならない。

# ●モンゴル仏教 観世音菩薩と活仏

松川 節

## ●開眼供養の日

一九九六年一月、モンゴル国の首都ウランバートルにある仏教寺院ガンダン寺境内において、十一面観世音菩薩立像の開眼法要が盛大におこなわれた。

高さ二六メートルに及ぶこの像は、二〇世紀初頭、モンゴル仏教界の最高指導者たる活仏ボグド・ゲゲーン、ジェブツンダンバ八世が眼病を患った際に、その快癒を祈って建立され、以来、モンゴル仏教のシンボルとして崇められてきた。しかし、一九三八年、スターリニズムがモンゴルにも吹き荒れ、大量の仏教僧が犠牲になったとき、この巨像は行方不明になった。ソ連に持ち去られたとも言われているが、真相は公表されていない。

観世音像が再建されたことにより、一九九〇年以後の民主化とともに再生したモンゴルの仏教徒たちは、信仰のよりどころを取り戻すことができた。これは、モンゴ

ル仏教再生の端緒であると同時に、モンゴル仏教の今後を占う重要なターニング・ポイントともいえる。なぜなら、観世音像への崇拜によって、信者のあいだに活仏ボグド・ゲゲーンへの信仰が復活し、それに伴って、モンゴルの仏教界は、先代活仏の転生者たる現活仏、すなわちジェブツンダンバ九世をいかに認定するかという問題をつきつけられることになり、その解決のためにはチベット仏教界におけるモンゴル仏教の位置づけが改めて問われるからである。

## ●モンゴル人と仏教

一三世紀はじめにモンゴルが歴史の表舞台に登場し、チンギスが大帝国を建設した際に、モンゴル人が最初に影響を受けたのはウイグル仏教だった。モンゴルが採用したウイグル文字によって、ウイグル語の仏教用語は楽々とモンゴル人のあいだに浸透し、モンゴル帝国官房

の要所を占めたウイグル人仏僧は、帝国内にウイグル人ネットワークを構築し、商業活動とともに訳経・出版などの宗教活動にもいそしんだ。

一方、一三世紀半ば、チベット仏教サキャ派の高僧バспаがモンゴルの帝室に接近するとともにチベット仏教が流行しはじめ、ウイグル人仏僧も競ってチベット語の經典をウイグル語とモンゴル語に翻訳しはじめた。この時代、仏教用語をはじめとするモンゴル仏教の基盤をつくったのはまぎれもなくウイグル人仏教徒であったが、モンゴルの帝室は次第にチベット仏教がもつ密教的色彩に傾倒し、ウイグル的要素を薄めていくことになる。

一六世紀の後半、モンゴルに二度目のチベット仏教の波が押し寄せた。一五世紀、チベットでは偉大な学僧ツォンカバが活躍し、彼を開祖として誕生したチベット仏教ゲルク派は新たな施主を得るためにモンゴリア布教を目ざした。これをうけてトゥメトのアルタン・ハーンはゲルク派に改宗し、同派の高僧ソナム・ギャンツォに「ダライラマ」の称号を与え、チベット仏教の外護者になることを宣言した。以来、モンゴルの仏教徒はほぼ一貫してこの派のチベット仏教を信仰しつづけている。一

九世紀になると、イフ・フレー（現在のウランバートル）にモンゴルにおけるゲルク派の総本山として、ガンダン寺が建立され、モンゴル仏教の確固たる拠点となった。

こうして広まったモンゴル仏教は、チベットと同じく出家仏教であった。一九世紀末のモンゴルでは男性の三人に一人が出家しており、ほぼすべてのモンゴル人が仏教信者であったといっても過言ではない。チベット仏教は生活の隅々にまで浸透していた。

例えば、彼らの移動式住居「ゲル」内の正面にはかならず仏壇が設けられたし、誰かがくしゃみをする、同席する者から「ボルハン・オルショー（仏様、お許しを）」という願がかけられた。また、今でもモンゴル人は、飲酒の前に右手の薬指を酒に浸して、空中に三回撒くしぐさをする。酒の精を天・地・中に捧げるというこのいかにもシャマニズム的にみえる行為は「セルチム」と呼ばれるが、この言葉は実はチベット語の「御神酒おみ」にあたる単語がモンゴル語に流入したものであり、もともとはチベット仏教儀礼に起源をもつしぐさである。チベット仏教は、このように深くモンゴル人の日常に入り込んでいる。

## ●復活の現況

一九九〇年の民主化以前、モンゴル国で公式に仏教活動をおこなっていたのは、首都ウランバートルにあるガンダン寺のみであり、その他の寺院は、一九三八年に大規模な破壊がなされて以来、宗教活動を禁止されていた。民主化以降、宗教活動の自由が保証され、モンゴル各地で還俗を余儀なくされていた僧侶たちが続々と復帰しはじめた。地元信者の寄進によって国内の一五〇の寺院が再建されはじめた。経済的理由からいまだに堂宇の建



観世音菩薩立像のオリジナル。



ガンダン寺観音堂。

造もままならぬ寺院が大半を占めるものの、とりあえずゲルを堂宇に見立てて法会が再開されている。

ガンダン寺広報室の話によると、一九九六年現在、モンゴル国では二五〇〇人の仏教僧侶が活動している。しかしこれは出家したての子どもの僧侶をも含めた数であり、学識ある僧侶は老人に限られているため、伝統の継承が危ぶまれているという。そのため、僧侶の教育を目的としてガンダン寺は一九七〇年以来、宗教専門学校を併設し、民主化以降は一学年の学生数を一〇〇人に拡大

して、二〇歳以上の男子学生を対象に四年間の仏教教育をおこなっている。

一九九一年に「モンゴル仏教協会」が設立され、ガンダン寺にセンターを設置して国内仏教寺院の横のつながりを強化するとともに、インド、チベット、青海省、内蒙古自治区、北京、ブリヤートなどの仏教寺院や諸外国の仏教協会と国際的な交流を始めた。現在のところ、国外のチベット仏教寺院との正式な交流は結ばれていないが、留学生の交換は盛んである。

また特筆すべきは、従来、黄帽派（ゲルク派）一色に染められたと思われていたモンゴル仏教界において、紅帽派（サキヤ派ないしはニンマ派）の寺院「デチンチョインホルリン・ヒード」が一九九一年七月に建立されたことで、小規模ながらもインドのサキヤ派寺院と連絡を取りながら活動を続けている。この派が、モンゴルにゲルク派のチベット仏教が広まる以前の仏教的伝統をどれだけ保持しているかは、注目に値するだろう。

一九九五年八月、カーラチャクラ法会をおこなうためにモンゴルを訪れたドライラマ一四世は、モンゴルの仏教徒によって熱狂的歓迎を受けた。ドライラマはチベッ

ト・モンゴル仏教を通して最高指導者であるため、熱狂的に歓迎されるのは当然のことであったが、さらにその裏には、モンゴル国内における仏教の最高指導者たるボグド・ゲゲーンの先代（第八世）が一九二四年に亡くなったとき、当時のモンゴル人民共和国政府は、その化身として転生すべき第九世を認定させなかったため、以来、モンゴルには実質的な宗教指導者が存在していないという理由もあつたのである。

ところが、これを遡ること四年前の一九九一年九月に、インドのドライラマ亡命政府は驚くべき発表をおこなっていた。ボグド・ゲゲーン八世の化身は、実は一九三二年にラサにおいて転生霊童として生まれており、一九五九年にドライラマとともにインドに脱出していたことが明らかにされ、ドライラマは、その人物がボグド・ゲゲーン九世であることを正式に認定したのである。

#### ●ボグド・ゲゲーン九世

九世は一九三二年一月にラサで生まれた。一九三三年、ドライラマ一三世が没したことにより、その名代たるラデン寺の摂政が、九世が四歳になった時点で化身として認定することを決め、デンゼン・ダルゲェの名を与

歴代ジェブツンダンバ・ホトクト転生表

- 第1世: Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po (1635-1723)  
 第2世: Blo bzang bstan pa'i sgron me (1724-1757)  
 第3世: Blo bzang ye shes bstan pa'i nyi ma (1758-1773)  
 第4世: Blo bzang thub bstan dbang phyug 'jigs med rgya mtsho (1775-1813)  
 第5世: Blo bzang thub bstan 'jigs med bstan pa'i rgyal mtshan (1815-1841)  
 第6世: Blo bzang thub bstan chos kyi rgyal mtshan (1843-1849)  
 第7世: Ngag dbang chos kyi dbang phyug 'phrin las rgya mtsho (1849-1868)  
 第8世: Ngag dbang blo bzang chos kyi nyi ma bstan 'jin dbang phyug (1869-1924)

えた。デンゼン・ダルゲエは七歳にしてラサのデープン寺のゴマン堂に入り、具足戒ぐそくかいとともにジャムベル・ナムドル・チョーキ・ゲンツェンの法名を授かり、二一歳まで学んだ。二五歳からラサのガンデン寺に移ったが、二九歳のとき、中国人民解放軍によるチベット改革が激化し、チベット側の反乱も強まったので、ダライラマと時を同じくしてインドに脱出した。

インドで彼は還俗し、家族とともにダージリンとマイ

ソールに住み、その後一九八一年からはマッディヤ・プラデシュ州に住んでいたらしい。一九九一年、ボグド・ゲゲーン九世に認定されるに及んでドラムサーラに居移した。一九九四年から九六年にかけては北米旅行をおこない、宗教活動への意欲を示している。

九世の認定問題については、当時の史料が残されていないため、これ以上詮索することはできない。ただし、一九二一年のモンゴル革命の際に宗教指導者として活躍し、のちにアメリカに亡命したモンゴルの高僧ディオワ・ホトクトの回想によると、ディオワ・ホトクトはボグド・ゲゲーン八世を師と仰いでいたが、一九四五―四六年にチベットで九世を名乗る人物と会った際、この人物を師の化身と認めることができなかつたとしている。これを根拠として、モンゴル人のあいだにも九世の認定を疑問とする声があることは指摘しておきたい。

ダライラマ政府は、モンゴル人の要請によって九世を認定したとし、また最近まで認定を発表しなかつた理由として、一九三〇年代当時、モンゴル人民共和国政府は仏教を弾圧していたことを挙げ、認定したとしてもモンゴル本国に送れる可能性はなかつたと釈明する。つまり、

ダライラマはモンゴルにおいて宗教の自由が保証されるのを待って、最高指導者の認定に踏み切ったわけである。当のボグド・ゲゲーン九世は一九九七年の時点で、いまだモンゴルに足を踏み入れておらず、ダラムサラーのダライラマ亡命政府にとどまっている。具体的な宗教活動をおこなっていないので、モンゴルにおける九世の知名度は驚くほど低い。

### ●活仏制とモンゴル仏教

ところで、このようにチベット人がモンゴル仏教界の最高指導者として認定され続けているのはなぜだろうか。その理由を明らかにするために、モンゴル仏教界の最高指導者が誕生した経緯をみてみよう。

先に述べたように、モンゴル仏教は一三世紀にウイグル仏教を産みの親とし、チベット仏教を育ての親として成立した。この時代のモンゴル仏教の特徴として、ふうう、元のフビライ・ハーンがチベット僧パспаと「施主・帰依処」の関係、つまり宗教上の関係を結んだことが強調されるが、これはチベット仏教側の見解であって、フビライにいかなる宗教的な意図あるいは政治的な意図があったかは実はまだよくわかっていない。むしろここ

で強調しておきたいのは、この関係は、一六世紀後半にトゥメトのアルタン・ハーンがゲルク派のソナム・ギャンツォに「ダライラマ」の称号を与えてチベット仏教の外護者になって以来、チベット年代記の作者がこの新しい「施主・帰依処」の関係を補強しようとして元朝期の事績に仮託した意味あいが強いということである。

いずれにしても、フビライからアルタンに至るまでのあいだに、モンゴルはチベット仏教の外護者であるという伝統が形成され、さらにダライラマ四世をモンゴル人に化身させるといった方法で、チベット仏教は着々とモンゴル人スポンサーを獲得していった。そして、一六世紀後半に活躍したチベット仏教の高僧ターラナータの化身として、ついにモンゴル人のなかから新たな活仏が誕生する。ボグド・ゲゲーン、ジェブツンダンバ一世（一六三五一―一七二三）である。

ボグド・ゲゲーン一世はモンゴル人の間で絶大な精神的支柱となった。そこで当時、外モンゴル支配を企てていた清朝は、この化身を政治的に利用すべく、さまざまな懐柔策をとった。

ボグド・ゲゲーン二世はやはりモンゴル人として転生

したが、清朝は、ボグド・ゲゲーンがモンゴル人の精神的支柱として絶大の影響力を及ぼしていることを危惧し、二世の死後、三世を強引にチベット人に転生させた。以後八世に至るまで、清朝はモンゴル仏教界の最高指導者としてのボグド・ゲゲーンを、すべてチベット人に転生させている。

このように、モンゴルの仏教徒は、歴史上好むと好まざるにかかわらず、チベット人を宗教上の最高指導者として戴くことを余儀なくされてきた。言い換えれば、モンゴルの仏教史は、その最初期を除けばチベット仏教の外護者としての歴史である。モンゴル仏教の教義の独自色がきわめて希薄であり、常にチベット仏教の一支流としての域をでないのも、このような歴史的経緯が影響しているのであろう。

ただ一度、清朝の崩壊を受けて一九一一年にモンゴル国の独立を宣言したボグド・ハーン政権は、一九二四年にモンゴル人民共和国にとって代わられるまで、ボグド・ゲゲーン八世を政教双方の最高指導者とした。八世はチベット人であったが、モンゴルが名実ともに政教を合わせ持ったのはこの時代が最初で最後であった。しか

し、人民革命後のモンゴルでは宗教活動が制限され、八世の化身たる九世ボグドは、現世ではなくシャンバラ国に転生するという伝説が政治的に利用されたため、モンゴル仏教界は精神的支柱を失ったままであった。そして民主化の訪れた今、またもやチベット人のなかからモンゴル仏教界の最高指導者が誕生しようとしているのである。

考えてみれば、チベットは、その仏教的性格から常に外護者を求め続けてきた。しかしその結果として、宗教面の支持に止まらず、政治的支配をも受けるといふ悲劇を繰り返したといわざるをえない。

これに対してモンゴルは、チベット仏教の外護者であり続けたため、独自の「モンゴル仏教」を成立させることができなかった。民主化以降の現在も状況は同じであり、モンゴル人は民族英雄チンギスへの崇拜を内に置き、それと棲みわける形で、精神的よりどころとしてのチベット仏教崇拜を外に置いて、両者を共存させている。一三世紀、フビライの時代につくられたこの二重構造は、現在のモンゴルでも変わらずに生き続けているのである。

## タンガディーン・ガルサン 運命は迷っているか？——わが幼き日々の追憶

訳…小長谷有紀

### ●運命を一つにした宿营地

四季おりおり、さまざまな色を織りなすポンパト山に、たくさんの冬营地がある。そのうちの一つに、三つの天幕からなる冬营地があった。

西南側に見える、白いフェルトで覆われた小さなゲルは、パポー・ラマ(僧)の家。その北側に、折り畳み式の壁四枚からなる黒っぽいゲルは、ジグメドドー老人の家。一方、入口正面の方は白いのに、奥の方は古くて黄色く、つぎはぎだらけのフェルトで覆われた、五枚の壁からなるゲルこそは、冬の厳寒期にもヒツジ群を野に放ち、日がな一日野に過ごすときも、キツネの毛皮帽子を脱ぎ、ヒツジの毛皮の内張り服から片腕を出して行く、寒さ知らずの頑強な男タンガドの家であった。

三つ編みした長い弁髪を短い革ひもで結わえているこの男は、見るからに俗人であり、親戚の人びとからも、また近隣の人びとからもタンガー・ハルフーすなわ

ち「黒い息子(若き俗人)タンガー」とよばれていた。

このように、占い師と獵師とヒツジ牧民の三戸が、一つのホト・アイル(宿营地共同体)となつて冬営していたのは、理由のあることである。

宗教のいわば専門学校を修了して占い師となつたパポー先生は、ホト・アイルに好運を保証し、災厄を遠ざける。一方、若い頃、ヒョウやオオカミを狩りに出かけたジグメドドー老人の役割は、錆びた罾わなやひもの罾で草原のネズミ(タルバガンやホイログ)をつかまえる。

パポー先生は老いた獵師にいつも「徳を積み！ 経でも読め」というけれど、頑固な老人は「私の一生の罪の数はおうとづくに尽きた。私は五本の血管(五人家族)を養おうとしただけのこと。しかし、私は人だけは殺してないよ」と応じて、決してラマ先生の言いなりにはならなかった。

遊牧民の習慣に基づけば、ホト・アイルでは日替わり

で交代してヒツジを放牧するものである。当然ながら、より多くの家畜をもっている人は、二日続けてヒツジの放牧にあたるべきである。しかし、このホト・アイルの場合、すべての群れを、タンガーが雨の日も、雪の嵐の日も、休むことなく放牧した。

そのわけは、一人はラマ先生であり、もう一人は年老いた義父で、この二人がヒツジの放牧当番からはずれていたのである。教養と、経験と、勇気の三つが、互いに助け合って、一つのホト・アイルを構成していたのであった。

そこに、寅の年の寅の月の寅の日の、朝焼けの寅の刻に、一つの新しい生命がつけ加わった。

### ●新しい人の運命

この日、ジグメドロー老人は、好むと好まざるとにかかわらず、ヒツジの放牧に出た。というのも、昼の午の刻に、婿のタンガーが賢い占い師に息子の運命を尋ね、名前を請うていたからである。

パボー占い師は、もともと牛車一〇八台分の経典をもっていた。しかし、一九三二年夏、バイドラグ寺院が大砲で焼き払われたとき、住まいや家具、典籍のす



タンガディーン・ガルサン。

べてが三日三晩で焼き尽くされた。

今では、親戚が用意してくれた、家というより小屋といたいたいような住まいを立てて、雨露をしのいでいた。

皿にもられた食、ドンボとよばれる筒に入ったお茶を持参したタンガーは、戸口に立ち、あらたまった口調で自分がやって来たことを告げると、一瞬たじろいだ。その家からはネズマツの香や線香の匂いがただよっている。さあ、家へ入った。老いた占い師は、時代の状況に合わせて、奥の座にわずかな仏像とわずかな経典を置き、その前方にカーテンをひいて、膝がつかえてしまうほど低い、カエルのような足のテーブルの上に筆と硯と、灰を用いて描く占い専用の板と、占い専用の賽子さいごころを秩序正しく並べた。

タンガーは入るやいなや、仏像にハダグ（儀礼用の絹布）をささげ、机には皿にもった食をささげて、火に牛糞をくべたのち、老いた占い師の小さな木椀に乳茶を満々とそそぎ入れた。パボー先生は「ホプチ・ハル」という書を選ぶことなく、運勢を見ることがもなく、文殊菩薩の九つの占いをするものもない。ただ、手近なものとして、「ゴンボのメルゲ」と

いう賽子占いをする。

血族に新しい人が増えたことを知って、賽子を投げて占い終えて、この男の子のゆがんだ運命をかなり早くから予見してしまった占い師は、お茶をゆっくりと飲みながら語った。

「ザー、ホー、あなたには、夜明けの明星となるべき、昼間の星を見るほどの息子が生まれた。心豊かで、衣食に富んで、思慮が広く、正直な人となるだろう」

「どんな災いがありますか」と尋ねれば、

「三つの寅に生まれた人の運勢は、内に火の質をもつゆえに、時代の道に合わせるのが難しい。黒い舌（呪い）と白い舌（賞賛）が大いにぶつかりあうだろう。一三歳、二七歳、四四歳の時に席を失い、移ろわねばならないであろう。一般に、黒の気と白の気、火の気と水の気は厳しく相反する。しかし、命に別状はない。水を飲むだけの祝福は強固である……」

「忌むべきことを御教示下さい」

「心臓は速く、口は速い、真偽のぶつかりあいから旅立つことがある」

「教養を身につけるでしょうか」

「智恵の始まりは、のちに加わる。しかしながら、人の子として首が足りないわけでないし

動物の子よりは才能に勝る

人生の秋からは書の徳が集まる」

「父や母の口に脂肪をふくませ、乳を注ぎ、最後にはハダグで顔をおおう（両親を幸福にし、最後に死を看取る）息子となるであろう。白い舌が口から遠ざかってあれかし（褒めすぎないことが望ましい）」

「どうか、わが子に名前をお与え下さい」

「ガルサン。モンゴル語で完べきな運命をもつという意味だよ」

「はい、わかりました。御礼に何をさしあげたらよろしいか」

「何も要らない。私はおまえに借りがあるから」

若い父親が、賢い占い師の家から出ると、ナーダム祭で七連勝した若い力士のように天にも昇る気持ちでいることを知ったのだろうか、太陽は微笑み、鳥たちまでもが飛び立ちさえずった。

●三つの家が二つに

時もまた鳥と同じく飛ぶ翼をもっているものだ。牧民の仕事は多忙をきわめる。両親は一尋の革ひもを奥の座の壁から息子に結びつけて、仕事に出た。放牧や、牛糞拾いや、搾乳に出かけた。

そうして冬と夏が交代し、息子ガルサンは二歳になっ

ていた。しかし、いつも笑って座っている頭の大きな息子は、残念なことに一言もしゃべれない。驚いたことに、一步も歩かず、それどころか這うこともしない。祖父母はそんな孫を「音のない白」と呼んで溺愛した。この呼び名は、母にとってはまるで賞賛のように思えたけれども、父には「舌のない愚かもの」と軽蔑しているように聞こえた。そして、家へ入るたびに息子に接吻し、抱き上げ、笑うのだけれども、草原の奥の座に出れば「仏よ、わが息子をなせに裁いたのか？」と涙を流し、髪をかきあげた。だからといってどうせよというのか。占い師のところへ再び赴く。

「心配いらぬ。おまえの息子は、のちに大いに歩むもの。のちに大いに語るもの。ゆがんだ運命を隠し、貯めるとはこのことだ。占いによる智は嘘をつかない。もしもこれが嘘になるなら、この先二度と私は占うまい！」

そんなふうに母方の叔父は悲しげに笑って、甥を大いに驚かせた。

ちようどこのとき、内務省の役人、赤の革命家、緑の帽子をかぶったダルジャーが、自分に吠えているイヌをおとなしくさせるために空砲を撃って火薬を匂わせながら侵入し、老いた占い師を連行していった。

パボー占い師は、捕まった「反革命分子」どころか、

まるで招かれてゆく客のように穏やかなままに、銃をもった革命家の乗るウマと轡くつわを繋つながれて疾走して消えた。父は涙を地に、母は乳を天にそそいで、三日後に老人は銃殺された。なぜなら、緑のダルジャーを筆頭とする赤の革命家たちが、占い師の智恵にとって代わるからであるという。

いかにして置き換わったのであろうか。

「おまえがそんなに有能なら、この穀粒の数を言ってみろ」と小さな穀類を満たした一つの木碗を置いた。

「正しく言えたらどうなるのか」と占い師が問うと、

「糸ほど細くなつたおまえの血管を許す！」とダルジャーは約束した。パボー兄は、二度占ってみて、最後に

「ゴンボのメルゲ」という養子占いをおこない、黍あひぢの数を告げた。人びとはまったく沈黙していた。ただダルジャーだけが碗の中の粒をカラスの嘴くちばしのようにつまんで数えていくうちに……占い師の言った数にちようど達しようとしたとき、ダルジャーはとび跳ねて、「おまえのその賢明とやらはどこへいった？ 粒は一つ足りない。このようにおまえの水を飲む運命も足りない」と言つて、賢い占い師のこめかみに銃口を向けて射殺したのだった。老いたラマが倒れる瞬間に、射撃した人の汚れた爪からまきに不足していた一粒の黍が大地に落ちた。

このようにして私たちの三戸が二戸になってから、三年が過ぎた。息子は五歳になろうとしていた。しかし、足を使うに至らず、また舌を使うに至らずじまいであった。父親ばかりでなく、母親もまた運命をひどく悲しむようになった。

昇る太陽のこちら側に、

どうして霧が晴れようか、霧はいつでもあるものだ。肉体に血をもって生まれたのちに、

どうして苦しみが消えようか、苦しみはつねにあるものだ。

牛糞拾いに行く妻が、群れ放牧に出る夫が、泣き泣き歌うは悲嘆なり。

彼らは胸に矢をもつ人のごとく苦悩しながら生きた。

「わが先祖ガルダンボシヨクトはチベット人の舌を抜いたという。それでわが息子が舌なしになったのだろうか？ また満洲人の脛けいを抜いたという。それでわが息子が足なしになったのだろうか？ 前世の因果がたたととは本当だ！」と悲嘆にくれた。またあるときは、あの占い師である母方叔父に対する信頼を失って「予言者は万

の嘘をつく、占い師は百の嘘をつく」と、思うこともあった。またときには、腕の中の穀粒の数をたがわず述べた占い師である母方叔父を信じて「そうだとも！ 叔父は言ったものだ、おまえの息子はのちに大いに歩み、大いに語ると」。

●もはや語らず、さらに語るなら……

詩人ガルサンは一九八八年の冬、大西洋を一六時間飛んでいるとき、「イイ、ヤア、私は主チングスの土地からずいぶん遠くへ来たものだ。のちに私は大いに行くというのは本当だなあ」と感動し、歓喜した。

一九六五年四月一日、モンゴル人民革命党は、詩人ガルサンをラクダ牧民としてゴビへ追放し、その言葉を公刊する権利を剝奪した。しかし、今日、民主化のおかげで、モンゴル文字と言語文化に関する最大の語り手となったのがガルサンである。なぜなら、モンゴル人はようやく今こそ、大陸を歩む「足」をもち、世界へ語る「舌」をもつようになったからである。運命はもはや迷わない。

### 【解説】

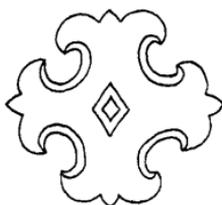
タンガディーン・ガルサンは、一九三二年、バヤンホンゴル県の遊牧民の家に生まれた。モンゴル国立大学卒

業後、教員、博物館学芸員といった職を経て、また映画製作、書籍編集に携わる。

一九五七年から、詩、児童文学、映画シナリオなどを書き始める。詩集『生まれた息子の言葉』でデビューしたが、その後反体制詩人として地方に追放され、一九七〇年代以降、作品をほとんど発表していなかった。

一九九〇年の民主化で名誉回復されてから、『火と芳香』（一九九二）、『風刺詩』（一九九四）、『三つの対の炎』（一九九五）と精力的に詩集を出し、健在をアピールしている。

（松田忠徳）



●シャマニズム

## 「ボーの宗教」の復活

西村幹也

### ●ボーの再登場

モンゴル人たちに「あなた方の伝統的宗教は何ですか」と聞くと、「仏教です」と答えるが、続けて「昔はボーの宗教でした」と多くの人が答える。信じるか信じないかは別としても、「ボーの宗教」というのを自分たちの伝統文化の一つと考えていることは確かだろうだ。この「ボーの宗教」は、一般にはシャマニズムと呼ばれる。そこで、まずシャマニズムについて簡単に述べておくことにしよう。

シャマニズムとは、シャマンと呼ばれる人物によって特徴づけられた宗教現象である。シャマンとは簡単に言えば、自らの精神を極度の集中状態（トランス）に陥らせることによって、超自然的存在、つまり自然界の精霊や祖先霊たちと直接に交流できる人のことだ。退魔招福、病氣治し、失せ物探し、占いなどの依頼を人びとから受

け、太鼓を叩いたり、歌を歌ったりしているうちに徐々に異常な精神状態に入り、自らの魂を精霊のもとへ飛ばしたり（エクスタシー、脱魂型）、精霊たちを自分の体に取り込んだりする（ポセッション、憑依型）ことによって、依頼の解決方法を超自然的存在から教わるのである。ロマンチックな言い方をすれば、精霊たち（モンゴル語ではオンゴットという）と語り合うことのできる人物なのだ。

モンゴル地域においては、北方の一部地域に脱魂型、その他多くの地域では憑依型のシャマニズムがそれぞれ観察される。ちなみにモンゴルではシャマン一般を「ボー」、男性シャマンをとくに「ザイラン」と呼ぶことがあり、女性シャマンを「オットガン」と呼ぶ。

現在、モンゴルではさまざまな形で民族文化の復興が観察され、この「ボーの宗教」も最近復活したものの一つである。「ボーの宗教」はチベット仏教の流入後、衰

退していき、社会的にも地理的にも周縁的位置に追いやられ、さらに社会主義時代にいたって、その活動は厳しく禁止され、弾圧されたという経緯をもつ。一九三〇年代の弾圧によって多くのボーが殺された。それを免れたボーたちにしても、古くから代々伝わってきたボーの衣装や儀礼道具類を隠さねばならず、弾圧を恐れた彼らの多くは、それらを燃やしてしまったという。その後民主化に至るまでの間にボー儀礼はもろろん、ボーの存在自体が表向きは否定されていたのである。

ただし、実際はこっそり儀礼をおこなってきたようだ。従って、復活というよりも民主化によって活動の自由を得て、その存在が顕現したという方が適切かもしれない。ボーが存在し、活動していくためには共同体の構成員たちが共通の世界観や価値観をもっていなければならぬ。ボーが長い年月を経てなお生き残り、活動を再開したということは、共同体がボーを存在させたことにほかならず、驚くべきはこのような伝統を維持し続けたことにあるといえよう。

### ●フブスグル・アイマグのボーたち

「ボーがいるのはどこだ」とモンゴル人に聞けば、必ず

モンゴルの西北部のフブスグル県と東部のドルノト県と答える。フブスグルにしても、ドルノトにしても、首都のウランバートルから見ると果ての土地である。フブスグルではダルハト人、ウリヤンハイ人、ツァータン人のボーたちが、そしてドルノトにはブリヤート人のボーが多い。ここではフブスグルのボーたちについて紹介することにしよう。

フブスグル湖の西側に「ダルハトの窪み」と呼ばれる土地がある。四方を三〇〇〇メートル級の山々に囲まれた盆地だ。夏の雨季には川が氾濫して湿地帯を作り、また冬になると雪が厚く積もる。このように車でのアクセスが困難な僻地にボーたちが生き延び、復活したというのは納得のいくことである。実際モンゴル人たちの中でも、ダルハト人は古い伝統文化を残している集団だといわれている。

ウランバートルから約六八〇キロ北西に行くと、フブスグル県の中心地ムルンがある。県庁所在地なので、結構大きな町だ。とりあえず街行く人をつかまえて「ボーがどこにいるか知ってる？」と聞いて回ることにした。すると多くの人たちが、何人かのボーの名前をあげた。

なかでもよく聞いたのが、ツエグメット・オットガンと  
バヤル・オットガンの二人だ。

案外あっさりとおボアの所在が分かってしまったので、  
拍子抜けした感じだった。それだけ人びとの関心が高い  
ということなのだろうか。人づてに聞きたどつていくと、  
あのボアはこんな事ができるとか、若いときはどうだっ  
たとか、結構いろいろな情報が聞けるのにも驚いた。禁  
止されていたとはいえ、彼らの意識の中ではボアは存在  
し続けて現在に至ったようだ。

その中から、話を一つ紹介しよう。

ツエグメット・オットガンは若い頃、あるオボア（石  
の堆積物。峠などにあり信仰の対象になる）を祀ることになっ  
た。このオボアは、かつてある男性ボアがいつも祀って  
いたのでそうだ。この男性ボアは天に帰る（死ぬという意  
味。モンゴル語でこのように表現する）とき、オボアのそば  
の木を指して、「私が死んだらこの木はいったん枯れて  
しまおうだろう。しかし後に再び花を咲かすことができる  
だろう」と予言したといういわくつきのおボアである。

ツエグメット・オットガンは「私が儀礼を始めると三  
羽の大きな鳥がやってくるでしょう」と予言してから儀

礼を始めた。すると不思議なことに、例の男性ボアが予  
言したように、木は花を咲かせはじめたというのである。  
さらに彼女の言った通り、三羽の鷺が飛んできてオボア  
の上を回ったというのだ。このとき、祀られていたのは  
アガリン・ハイルハンという強力なオンゴットで、また  
ツエグメット・オットガンの守護神にもなっているとい  
う。付け加えるならば、彼女の使役するオンゴットたち  
は、鳥の形をしたもののだそうだ。

このような半ば伝説になったような話を、人びとは半  
信半疑かもしれないが、伝えてきている。

### ●ボアの「力」

社会主義時代にボアが儀礼の際にオンゴットを憑依さ  
せたり、自分の魂を異界に飛ばしたりするといった不思  
議な事は科学的に否定され、呪術的権威は失墜したはず  
なのに、いまだにボアの持つ、またかつて持っていた  
「力」への恐れは失われることなく残っている。こうい  
った伝統的世界観や価値観は、かつてと全く同じではな  
いにせよ、彼らボアを擁した土地の人びとの行動にさま  
ざまな形で影響していると考えられる。

いくつか例をあげよう。



「ダルハットの窪み」の入口、ウリーンダワー峠にあるオポー。



ツェレンマー・オットガン。

ムルンで会った人の中に三〇代前半の男がいた。彼はムルンでは結構な顔だそう。先のバヤル・オットガンも、彼の意見には従う。さらに彼は「わかる」というのだ。つまり、ポーのような占いができるといのである。そして周囲の人びとからも尊敬を集めているのだ。よく聞くと、彼はポーの血統として皆に認められているのだ。

そう。実際彼の祖母がポーだったそうで、家には彼女の衣装などが保管されている。そして、自らポーを名乗ってはいないのだが、多くの人が相談に訪れている。つまり、この地方の人たちがポーに対して認めたカリスマが現在も存在しているのである。ポーの血統というだけで、彼は尊敬と畏怖の対象になりうるのだ。

もう一つ例をあげておこう。私が訪問したモンゴル・ウリヤンハイ人のボー、ツェレンマー・オットガンのところでのことだ。彼女は九一歳の高齢で、かなりボケが進んでいたために、こちらの質問にほとんど答えることができなかった。しかし、ここにはノイン・ノローと呼ばれる儀礼道具が残されていた。これは皮にさまざまな形の金属や人の形をしたフェルトを縫いつけたもので、オンゴットがいるところだという。

彼女は儀礼が始まると、口琴を弾き、歌を歌いながら徐々にトランス状態に入っていた。歯が抜けていて、歌っている歌の内容はよくわからない。しばらくすると、鳥の鳴き声や妙な声を立てはじめる。儀礼前まではよぼよぼしていたのに、歌を歌い、体を左右に揺するうちに、背筋も伸び、声にも張りが出てきた。三〇分くらい歌っていたが、突然「帰ろう帰ろう」と歌い、まもなくふつうのよぼよぼの老婆に戻った。そして依頼に回答しはじめたのであるが、困ったことに、彼女はオンゴットに聞いてきたことを忘れてしまったと、すまなさそうに笑っていた。

彼女がこのようにぼけてしまい、ボーとしての能力が

低下したからだろうか、周囲の人たちの彼女への対応は冷たいものがあつた。ムルンで会つた男性と比べると、ずいぶんとそのカリスマ性は低いようであつた。ところが、この周囲の人たちの間での脅し文句が「ボーの婆さんに頼むぞ」なのである。つまり婆さんに頼んで呪つてやるということなのだ。そしてこの言葉が立派に、影響をもっていることが興味深い。社会主義時代ではこうはいかなかつたはずで、ボーの活動の復活と同時に若い人たちまでもが「ボーに言いつけてやる」という表現を使うような状況になつたのだ。当然このせりふをボーの血統の者が発すれば、相当の脅し文句になるのであり、今後新しいボーを生む素地がここにあるように思われる。つまり、周りの人びとがボーをつくるのである。

### ●太鼓を使うボー

先のツェレンマー・オットガンのように、口琴を使うボーを「ヤブガン・ボー（徒歩のボー）」という。次にシベリア南部のシャマニズムの報告に多く見られる、太鼓を使ったツェグメット・オットガンの儀礼の様子を紹介しよう。

まず依頼者の質問を聞き、ネズの葉を燃やし、煙をく



ツェグメット・オットガンの口琴を使った儀礼。



ソーユン・オットガンの太鼓を使った儀礼。

ゆらせ、周囲を清める。オットガンは椅子に座ったまま、口琴を弾きつつ体をゆっくりと揺らす。次第に動きは激しくなり、今度は歌を歌う。この歌は自分が誰かを告げ、自分の守護神をほめたたえる内容である。次に立ち上がり、太鼓を持ち、叩きはじめる。ゆっくりと不定期な叩き方だったのが、次第に激しく大きくなる。ほとんど彼女の目は閉ざされたままで、時々歌の合間に「カッコー、

カクスー」といった鳥の鳴き声や「シュクシュク」という妙な声を発し続ける。三〇分くらいすると再び座り、口琴を弾いて、四方につばを飛ばしながら自分の顔をなで、一瞬白目をむいたかと思うと、次の瞬間にはふつうの状態に戻っていた。そして最後に再びネズの葉の煙であたりを清めて、儀礼は終わった。  
説明によると、歌を歌ってオンゴットを呼び出し、そ

のオンゴットに自分の魂が乗り移る。するとオンゴットがさまざまなものを見せてくれたり、他の強いオンゴットの所に行けるようになり、そこで話し合いをしてくるのだそうだ。彼女の使うオンゴットたちは鳥の形をしていることから、途中で鳥の鳴き声が出てきたりするのでそうである。

弾圧を受けた時代に、多くのボーは「ヤブガン・ボー」になった。太鼓は大きくて隠し通せなかったが、口琴は時代の波を逃れたのである。本来太鼓というのはボーの乗り物となるウマと見なされ、これに乗ってオンゴットのところに行くのだといい、儀礼において非常に重要な意味をもつものである。「本当の」儀礼とは、太鼓を使うものだと言はう。そして彼女は儀礼の前に、うれしそうに太鼓を叩いていた。再び儀礼をする自由を得たとき、真つ先に彼女がしたのは太鼓を作ることだった。モンゴル人たちにとってのウマと同様の意味をボーの太鼓はもち、復活の象徴的存在であるといえるだろう。

### ●新しいボーの登場

伝統的な「ボーの宗教」では、ボーになるには、ボーの血統にあり素質をもつ者、もしくは突然神がかって病

気になった者のいずれかが、先輩ボーに弟子入りしてボーの技術を身につけるといふ過程を経なければならない。実際観察していると、周囲の人びとはボーの血統にカリスマ性を認めているようである。

今まで私が出会ったボーたちは、皆ボーの血統に生まれ、師を持ち、修行したボーであった。彼らは口伝で召喚歌や讃歌を教授され、長い年月をかけて一人前のボーとなっていた。共通の世界観や価値観をもつ集団内で機能してきたのが伝統ボーたちである。ところが最近では、先輩ボーから口伝を受けていない者がボーを名乗るようになってきている。

先にあげたムルンの男性のほかにも何人かの「わかる」という人に会った。彼らのところにもさまざまな相談事に人が訪れるという。彼らに共通していることは、ボーの血統にあるということ、よく話すということ、さらに先祖ボーの遺品を占いに使うということである。自らがボーの血統であるということ、ボーの遺品を持つことを喧伝し、これによって権威を獲得しようとしているのだ。こういった新しいボーを偽物だといって糾弾する人たちもいるが、現地の人びとは彼らを「わかる」人と

して認めている。人びとにとっては、ボーの問題解決能力が重要なのである。

こういつた新しいボー（ボー予備軍とでも言うべきか）の述べることは、非常に理屈っぽく説明的になっている。彼らの話は、仏教的解釈と自然崇拜・祖先崇拜の混ざったもののような様相を呈している。かつては一定集団においてのみ機能していたボーの役割は、依頼内容の多様化や自分の所屬する集団以外の依頼者に対応しなければならなくなったのである。つまりボー自身が、人びとに受け入れられるように、もしくははその場の人びとの共通認識に合致するような形で世界観を新しく構築し、それについて説明を加えねば、カリスマを得られないという状況なのである。従って、現在のモンゴルのシャマニズム、「ボーの宗教」は伝統の復活、復権と同時に、新しい社会のニーズに対応した新しい伝統の創造過程にあるといえるだろう。

### ●ボーに求めるもの

こうして述べてきたことは「ダルハトの窪み」での観察によるものであることを断っておかねばならないだろう。モンゴル文化は非常に地域差が大きいからである。

ある地方では新しい形へと変化してゆこうとしている一方で、伝統的な方法にのっとりたボーが復活しているという状況がある。いずれにしても、モンゴル人たちが「ボーの宗教」を自分たちの伝統文化の一つとしてとらえ、その復活を歓迎していることは間違いない。

近年、ウランバートルではボーに関する書物が発行され、ドキュメンタリーが制作され、何度か新聞紙上でもボーの話題がとりあげられている。歌舞団がそのプログラムにボーの踊りをとり入れるなどの動きもある。

ボーの宗教にモンゴル人たちが今後何を求めていくのかはわからないが、過去から未来へとつながりをもった文化であり、変化を繰り返しながら伝えられていくだろうことは断言してよいだろう。この時期のボーの宗教の顕現化は、民主化による伝統復興という意図的な要因のほかに、社会による要請といった必然的な要因が絡んでいるようである。いずれにせよボーは活動を始め、オンゴットとの交流を再開したのである。

## 復権進む伝統医学

前田壮二郎

## ●医療と社会

古典落語の代表的マクラの一つに、「葛根湯<sup>かつこんとう</sup>医者」なるヤブ医者が登場する。頭痛や風邪、腹痛など、要するにあらゆる疾病<sup>しつびい</sup>に「葛根湯」を処方してことたれりとした、かつての漢方医のことを風刺した話である。

ヤブ医者はさておき、「葛根湯」が、当時、漢方の代表的処方の一つとして有名であったことは、落語のネタにされたことからもうかがい知れる。

しかし、現代日本の医療事情ではどうだろう。現代医の中で「葛根湯」の名前くらいは知っていても、どれだけの者がアスピリンに代えて処方するだろうか。まして、漢方が古来中国の医学から派生したものの、実際には日本で独自に発展を遂げた「伝統医学」であることを、どれだけの者が知っているだろうか。明治以降の日本社会におけるドラスティックな変遷は、医療にも大きな影響を

与えたわけである。

医療が社会から離れて存在し得ない以上、時代とともに変遷する社会的・政治的状况から無縁ではありえないことの一例である。

モンゴル国の場合はどうだろうか。この国は、最近の七〇年間に限っても、二度の大きな転機を経験している。一度目は、一九二一年の社会主義革命以来、旧ソビエト連邦の衛星国となったこと。二度目は、一九八九年以降のモンゴル版ペレストロイカである。

社会主義時代、旧ソビエトを経由して西洋医学が移植された。社会主義体制では、宗教が禁止されることはよく知られている。モンゴルにおいても、チベット仏教が弾圧され、密接な関係のある伝統医学も熾烈<sup>しかり</sup>な状況に置かれた。かつて六〇〇とも八〇〇ともいわれた寺院はことごとく破壊され、唯一、ガンダン寺だけがわずかに命



モンゴル伝統医学センター。

脈を保った。僧(ラマ)や伝統医もごく少数の者を除いて多数殺害されたという。しかし、密かに信仰する者たち——主に老人たち——によって、仏教および伝統医学は連綿と支えられてきたのである。

以上の経過から、現代モンゴルにおける医療の状況は、大きく二つの潮流に分かれていることが理解されると思う。強引な例を日本に求めれば、それは、いわゆる医者・現代西洋医と、古来からの伝統医学の流れを汲む漢方医や鍼灸・整体師の關係にあてはめることができるか

もしれない。ただ、モンゴルにおいては、伝統医学の担い手はその多くが僧侶であった。伝統医学はチベット仏教に内包される形で伝承されてきたのである。

#### ●現代医療事情

モンゴルで、実際に病気になった場合、人びとはどうするか。

一般的には、やはり西洋医学に依存している。全国に国営の大病院が設置され、その下部に系統樹のように病院や診療所組織がおかれている。国営の大病院は第一・第二・第三と分かれていて、心臓循環系・呼吸器系・消化器系などの臓器別に専門分科している。このほか、結核療養施設や産婦人科専門・小児専門の施設なども全国に配置されている。

社会主義時代には、医療は無料であった。現在は、日本のような国民皆保険制度がとられているようであるが、まだ試行錯誤の状態で、一般国民には馴染んでいない。国民は、自分で注射器や医薬品を購入し、病院の診察を受けるのが実情であるらしい。ひとしきり喧伝されたような物資不足は、急速に改善されつつあるようである。たとえば、一九九五年には韓国企業と合弁の注射器およ

び針の工場が設立された。医薬品の輸入も活発だという。ただ、CT（コンピュータド・トモグラフィ）などハイテク医療機は数台がウランバートル市内にあるものの、一度壊れると修理できず、メインテナンスは困難であるようだ。

一方、伝統医学は民主化以降、急速に復権を果たしつつある。わずか、五、六年の間に寺院は次々と再建され、ウランバートルには伝統医療を専門とする国営の病院・研究施設が二つ設置された。

その一つが、モンゴル伝統医学センターである。ウランバートル市の南郊、ボグド・ハーン宮殿を過ぎ、トル川に架かる橋の右手沿いに位置している。

院長のトゥモルバトウル氏は、西洋医学出身でありながら中国医学を修め、現在はモンゴル伝統医学を研究・実践している。この施設は、一般の外来診療はおこなっていない。すべて、他の医療施設からの紹介患者である。癌患者や高血圧・糖尿病患者など、西洋医学的な治療が困難だったり、慢性の経過をたどる患者が多いとうかがった。治療は、伝統的食餌療法、伝統薬、鍼灸、温熱療法（温泉浴を含む）、マッサージや瀉血療法（しゃくけつぽう）などを組み合

わせておこなっている。

民主化以後、伝統医学に基づく個人の病医院も開設が認められた。ウランバートル市内だけで、すでに二〇ほどの私立病医院があるらしい。その一つ、ウランバートル市の北にある最も高名なMANBA DATSUN（チベット仏教の医療機関）の意。モンゴル伝統医学研究所（医院）を訪ねた。外観は廟（びやう）そのものであり、内部では僧侶が伝統のつとめた法要をおこなっていた。院長のナツァグドルジ氏はもちろん僧侶であり、約二〇年間、伝統医学の研究を積んできたとのこと。活仏の主治医でもある。

一九九一年から、現在の医院を運営している。一日に、約九〇人の外来患者を診察するかたわら、教育をおこなう製薬を指導している。

ちなみに、当院で勉学するための受験は厳しく、毎年四〇〇人の応募があるうちで合格者は二〇人。六年間の修業を終えて卒業できるのはさらにその半数の一〇人であるとか。一九九六年ようやく第一期生が送り出された。

#### ● 伝統医学の特質

モンゴル伝統医学は、まさしく医学と呼ぶにふさわしい体系を有している。つまり、治療を施すにあたりしつ

かりした基礎理論が備わっている。

とりわけ、その基礎理論の由来が、インドからチベットを経由して伝播されたアーユルヴェーダであることは驚きである。一九九三年、小長谷有紀によって、モンゴル医学が、熱帯で生まれた古代インドのアーユルヴェーダの北方最前線であり、寒冷地仕様であることが紹介された。このインドーチベットーモンゴルという南北の文明潮流は、アジアをもつぱらシルクロードやステップル

ートといった東西の方向でとらえてきた歴史観に、新たな視座を加えるものである。熱帯で誕生したアーユルヴェーダが、モンゴルのような寒冷地にかんして根づき、変容を遂げるに至ったのか。医療人類学の一観点に立つて考察するだけでも誠に興味深い。

物質を、空・風・火・水・土(地)の五大元素で説明し、人体においてはこの五元素を三つの要素(ドーシャ)で表現するアーユルヴェーダの根本原理は揺るぎなく受



マンバ・ダツァン(医薬学部)。



マンバ・ダツァンのナツァグドルジ館長(左)。

け継がれている。ただし、先述のトゥモルバトゥル氏や  
ナツアグドルジ氏によれば、現在の基礎理論は決してア  
ーユルヴェーダの焼直しではなく、モンゴル理論と呼ん  
でもよいほど変化しているらしい。

実際の治療法となると、関係は複雑になる。今まで見  
聞した限り、現在のインドでアーユルヴェーダ治療とし  
て広くおこなわれている油（胡麻油が有名）を用いるマッ  
サージや運動療法としてのヨガは、モンゴルではおこな  
われていない。薬にしても、チベットの丸薬とほぼ同じ  
ものは多数見かけたものの、煎じ薬のたぐいは見かけな  
かった。これら、チベット薬類似のものも、原料となる  
薬草は（特殊なものを除き）すべてモンゴル国内で自給さ  
れているとのことである。

### ●馬乳酒治療法

モンゴル伝統医学に含まれながら、アーユルヴェーダ  
を基礎とする分野とはやや異なる治療法が存在する。馬  
乳酒を用いた治療法がその一例である。モンゴル族ある  
いはさらに古い時代の遊牧民に伝わる治療法と言えるか  
もしれない。

馬乳酒は、ウマの乳から作られた少量のアルコール分

(二〜三%程度)を含む発酵飲料である。モンゴルの伝統  
的飲料として名高いが、紀元前からスキタイなどユーラ  
シアの遊牧民により飲み継がれてきた。一三世紀の旅行  
家マルコ・ポーロやルブルクの記述では「クミス」——  
草原のワインとして紹介されている。この飲み物は、現  
代においても、なおモンゴル族にとって単なる飲み物以  
上の精神的な象徴であり、たとえばナーダムに欠かすこ  
とができない重要なものである。

一三世紀に記された『元朝秘史』に、かの英雄チンギ  
ス・ハーンが危うく一命をとりとめるくだりがある。タ  
イチウト族との決戦で、ハーンは頸動脈を傷つけられ、  
大量出血する。部下のジュルメが裸で敵陣に乗り込み、  
敵の車から馬乳酒を探そうと試みるが果たせず、代わり  
に乳酪（ヨーグルトのたぐい）を持ち帰り、ハーンに飲ま  
せるのである。

こうして、チンギス・ハーンは馬乳酒ではなく乳酪で  
一命を救われるのであるが、ジュルメが最初に求めたの  
が馬乳酒であったことから、馬乳酒が大量出血者に役立  
つことが、当時すでに認識されていたのは間違いない。

また、元朝時代（一四世紀）、フビライの飲膳太医とし

て高名を成したフスファイが著わした『飲膳正要』には、馬乳の性質・効用が「性冷、味甘。渴を止める。熱に効く」と記されている。

このように、独自の歴史を持つ馬乳酒治療法であるが、その現代的応用例を紹介したい。

一つは、結核の撲滅プログラムに馬乳酒を応用すべく研究を推進している例である。

国立結核センターのツォグド医学博士は、一〇年来、結核の馬乳酒治療に取り組んできた。博士によると、モンゴル国での結核の罹患割合は、現在、人口一〇万人に対し六八例である（ちなみに、日本では約三五例）。馬乳酒が結核治療に有効であることは伝統的に知られていたが、その理由の一つに、牛乳などに比べてビタミンやミネラル、不飽和脂肪酸などに富んでいて、とくにビタミンCの含有量は、牛乳の三〜四倍あるなど栄養価が高いことが挙げられる。また、馬乳酒の中には、乳酸菌や酵母の生菌が多数含まれていて、免疫に対して、何らかの働きをすることが考えられる。食前に一回につき五〇グラム、一日一〇〇グラム程度を摂取する。食欲の改善効果も認められるとのことであった。

その他、ロシアや中国内蒙古自治区の論文によると、高血圧や狭心症・糖尿病・胃炎などにも幅広い効果が認められている。

たとえば、一九九一年、内蒙古シリンゴル蒙医研究所のジャムス医師により、冠心疾患に馬乳酒治療をおこなった結果が報告されている。狭心症例二〇〇例のうち、日本製の心電図を用い異常が認められた一二七例で、四八％に心電図の改善が認められた。同時に測定されたコレステロールや中性脂肪についても、有効率は九〇％以上であった。

ともかく、酒とも栄養ドリンクとも、はたまた乳製品あるいは発酵食品とも、いずれにも分類不能な摩訶不思議な飲み物が馬乳酒である。これがふれこみ通りであれば、いわば不老長寿のバイオ飲料である。モンゴル人は伝統的に野菜を摂らず、塩で味を付けた肉を主食としてきた。栄養学からみて、一見偏った、心血管疾患のリスクファクターの多い生活にみえる。しかし、別表に挙げたように、心血管疾患が死因として飛び抜けて多いわけではない（ちなみに、一九九三年の日本の心血管疾患による死亡率では人口一百万対に換算して、心疾患一九・〇、脳血管疾患

九・六)。この理由を食生活に求めるならば、馬乳酒や他の乳製品、あるいは頻繁に飲まれる乳茶にその秘密がありそうである。

### ●伝統医薬と独自の治療法

薬については、モンゴル国内で薬草のほとんど全てを自給していることは先に触れた通りである。鉱物や動物資源は全て自給というわけにはいかないらしいが、現在の日本の漢方が現代中国薬と異なるように、独自の變遷を経ている可能性がある。その数、数百に及び、現在までに多数の薬学専門書が残されている。また、近年、特に内蒙古から同種の専門書が多数出版されているが、基礎科学的研究は端緒にいたばかりであり、今後の展開が待たれる。

モンゴル固有の伝統医学には、他に、動物の体を使った温熱療法（セプス療法）・独自の接骨術・震盪法しんどうなどがある。

以下、ソロングト・バ・ジグムド著『モンゴル医学史』を参考に、その実際について紹介しよう。

セプス療法は、ウマやヒツジ・ヤギなどの家畜を屠殺後、まだ残っている体熱で患部を温める一種の温熱療法

である。ウランバートル市内では、一部に温泉が湧出し、また薬浴治療が比較的容易に受けられることから、この療法はおこなわれていなかった。しかし、地方では今もおこなわれているらしい。

接骨術は、モンゴル医学の名部門として名高い。乗馬が生活に必須の遊牧社会では、落馬による事故も多く、骨折や外傷の治療が発達したものと思われる。かつて、清朝政府が整骨の専門家をモンゴル人に求めたほどである。現在でも、白酒（アルコール分六五度）を用いたマッサージを加えて骨折を治療する方法が、内蒙古自治区の雑誌「蒙医薬」などにしばしば紹介されている。西洋医学の常識からすると、骨折は整復した後、ギブスなどで固定し安静を保つことが必須であるのに対して、ここでは骨折直後、早期・中期・後期にそれぞれ白酒を振りかけてマッサージを加える。

震盪法は、脳震盪に対し足の裏をたたく（振動を与える）方法や、内臓の創傷や腰部の挫傷に振動を加えて治療する方法として知られる。現在でも応用されていることは、前述の雑誌「蒙医薬」に「正脳術」という論文があり、具体的な治療方法が示されていることからうかが

分類	人口1万人にお ける発生率 1992年
1. 心臓循環器系	20.6
2. 呼吸器系	18.4
3. 腫瘍および新生物	13.6
4. 外傷および中毒	6.2
5. 消化器系	5.8
6. 感染症および寄生物疾患	3.2
7. 新生児疾患	3.0

疾患別死因

Mongolian Health Sector Review, July 1993より

い知れる。日本の柔術における「喝」を思い浮かべるが、一メートルほどのひもや鉄棒を用いる点で異なる。こうした治療法も、馬乳酒療法と同じくアーユルヴェーダ以前から存在していた伝統的医療であろうと考えられる。

### ●これからのモンゴル伝統医学

一九七八年、世界保健機構（WHO）は、アルマ・アタ（現在のアルマトウイ）で「プライマリー・ヘルス・ケアに関する世界会議」を開催した。結果、承認された宣

言が、いわゆるアルマ・アタ宣言であり、「西暦二〇〇〇年までにすべての人に健康を」として、その目標が広く知れわたっている。この中で、ヘルスワーカーの一員として、社会的・技術的に訓練された伝統的医学従事者の必要性に言及している。

世界の人口の約半数は、今なお、いわゆる西洋医学とは無縁の世界で生活しており、したがって、医療は伝統に根差した方法に負っている。とくにアジアは、ギリシヤ・アラビア発祥のユナニー医学、中国より発祥し韓国

や日本に広がった中国医学、インド・アーユルヴェーダ系列のシッター・チベット・モンゴル・タイ古・インドネシア（ジャウム）医学などがあり、非常に多様である。こうした伝統医学は、長年各地で一定の役割を担ってきたものであり、西洋医学の隆盛の前にすべてを葬り去るのは、貴重な文化の抹消にも等しい。幸い、先述のように、WHOにおいてとりあげられたごとく、伝統医学の重要性の再認識および活用が活発化してきている。一九九四年には東京で、第四回のアジア伝統医学世界会議も開催された。

モンゴルにおいては、これまで紹介してきたように、西洋医学の有用性は十分認知されているものの、医療経済上あるいは生活慣習上の理由から、必ずしも全面的に機能しているとは言い難い。たとえば、先のCTの例でもわかるように、精巧な医療機器は導入するだけでは長く機能しない。メインテナンスが十分保証される必要がある。言い換えれば、高度な機械技術を背景にした社会の存在が不可欠なのである。また、遊牧民には、草原の地に根を張り、遊牧生活の機微を熟知した伝統医の方が、診断のために施設を構え、患者を待っている西洋医より

も身近な存在であることは間違いない。まして、伝統医の多くは僧侶でもあるのだから、宗教を介し精神的な役割をも果たしうる。

この傾向は、将来においても大きく変化することはないであろう。いやむしろ、おからの民族主義の風を受けて、伝統医学はますます隆盛に向かう勢いが感じられる。そして、このような現象は、けっして発展途上国ばかりでなく、日本では漢方が、西洋ではハーブ治療などオルターナティブ治療が息長い人気を得ている現状を顧みると、世界的なものと言えるかもしれない。ある意味で、先のアルマ・アタ宣言は現状を追認したに過ぎないのかもしれない。

二〇世紀末の社会情勢は、新民族主義の台頭が一つのキーワードと言えるだろうが、医学の分野も西洋絶対主義から、相対化の時代にさしかかっているといえよう。二一世紀は、こうして相対化された文化が互いに相克を繰り返し、やがて、まったく新しい文明を産み出す世紀になる予感をはらんでいる。モンゴル医学が、その先駆けになることも、けっして夢ではないのである。